巻頭言

AI時代の認知心理学は人文科学でもあるべきだ

千葉大学 名誉教授
御領　謙（ごりょう　けん）

私の卒業論文（1963年度）は視野闘争に関する実験心理学的研究であった。両方の目に別々の画像，例えばウサギと亀とを見せると，両者が重なって見えることは少なく，二つの画像が交互に見える。何故こんなことが起こるのだろう？　目から神経系に入った情報がどのように処理されて意識的知覚が発生するのか？　卒論を通して，このことが一生のテーマとなった。大学に職を得てからの関心は，短期記憶，ワーキング・メモリ，注意，単語認知など認知心理学の主要問題に広がった。私自身の貢献は無に等しいが，私のキャリアと重なるここ50年ほどのこの分野の発展は目覚ましい。今では心的情報の流れ図（認知機能モデル）で日常行動や認知機能障害などをかなり詳しく説明できるようになった。

だが大事な問題が残されている。認知機能モデルで陰に陽に必要となるのが，情報の流れを制御し，心的情報を生成する中央実行系（CES）という要素である。このCESの機能についてはかなりよく議論されてはきたが，根本的な問題が残されているのだ。私たちは自分の心を振り返って見るとき，まさに「私」がこのCESの働きを監視し，実行していると実感できる。しかしこの「私」とは一体何であるか。自然科学的方法をとる認知心理学は，比較的下位の取り組みやすい認知機能研究に傾斜しがちで，残念ながらこの根本的な問題を棚上げにしている。

近年AI（人工知能）の進歩が著しく，人間の認知機能を遥かに凌ぐAIが近い未来に現れると予測する人も多い。AIにもCES機能が必須であるが，当面はその大半は人間の支配下に置かれるであろう。しかし，もし完全に自立するAI，つまり「人工的私」に支配されるAIが現れるとすると話は厄介である。人類はそのようなAIが現れる前に，「私とは何か」についての考究を極限まで煮詰めておく必要がある。そして仮にも人間の「私」に似ても似つかぬ，悪魔的な「人工的私」が出現することのないように，技術的進歩の舵取りをする必要がある。

ところで「私とは何か」というこの難問は，自然科学的理解を超えている可能性が高い。だが人類が自らを知る方法は自然科学的方法に限られているわけではない。認知心理学は，臨床心理学など心理諸科学と協働するとともに，哲学や文学などの人文科学的接近による人間理解の営為にも積極的に目を向け，「私」やCESの総合的理解に努めるべきではないだろうか。（プロフィールの著訳書③の，序章と終章などを参照）

Profile―御領　謙
1964年，大阪市立大学文学部卒業。1966年，大阪市立大学大学院修士課程修了。文学博士。1966年に千葉大学文理学部助手。1983～2006年，千葉大学文学部教授。2006～2014年，京都女子大学教授。専門は認知心理学。主な著訳書は，①『読むということ（認知科学選書5)』（東京大学出版会），②『人間の情報処理：新しい認知心理学へのいざない』（訳，サイエンス社），③『最新認知心理学への招待：心の働きとしくみを探る　改訂版（新心理学ライブラリ7)』（共著，サイエンス社）など。

心理学ミュージアム

文教大学人間科学部 准教授
増田知尋（ますだ　ともひろ）

2005年，日本大学大学院文学研究科修了。博士（心理学）。立教大学プロジェクト研究員，食品総合研究所特別研究員を経て，2015年より現職。専門は知覚心理学。

文教大学人間科学部 実習支援員
草野　勉（くさの　つとむ）

2010年，首都大学東京大学院人文科学研究科単位取得退学。東京大学，東京海洋大学等の研究員を経て，2019年より現職。神奈川大学人間科学部非常勤助手を兼任。専門は視知覚。

文教大学における心理学の古典的実験機器の常設展示と学びへの活用

写真１　文教大学で展示されているカイモグラフ（E.Zimmermann 製）

写真２　文教大学で展示されている振子型測時計（竹井機器工業製）

写真３　文教大学における実験機器の展示の一例。手前には学生が学習用に自由に使用できるスペースが設けられている。

写真４　機器体験の様子

文教大学における心理学の歴史は，1976年に立正女子大学から文教大学に改称し，人間科学部が設置されたときに始まります。その後，2008年に心理学科が新設され，現在に至っています。そのため，これまで当欄で紹介されてきた古典的実験機器を有する研究・教育機関と比べてもその歴史は短く，文教大学内で実際に心理学の教育・研究に用いられてきた古典的な実験機器や関連する資料はほとんどありません。

文教大学で機器の展示・保管を開始した経緯は本誌68号の当欄でも紹介されていますが，2010年に，当時文教大学教授であった椎名健先生が立教大学からいくつかの古典的実験機器をお借りし，学内に展示されたことに始まります。その後，2015年の9月に，それまで立教大学で展示・保管されていた機器・資料の大部分が文教大学に移されました。それらの機器は，立教大学名誉教授の長田佳久先生を中心とした，古典的実験機器のアーカイブの作成と活用を目的とした日本学術振興会科学研究費補助金のプロジェクト（実験心理学における古典的実験機器のアーカイブ化とその活用（2007年～ 2008年）；心理学の古典的実験機器に関するデータベース作成とその活用（2010年～ 2012年））の活動の一環として，国内のさまざまな大学で廃棄される予定の機器を収集していたものでした。そのため，この時点で文教大学にはそれらの大学の機器が集合していたことになります。さらに，文教大学で機器展示を開始した後も，いくつかの機関から同様のご提案をいただき，現在では7研究機関から移設された100点近くの古典的実験機器や関連資料がキャンパス内に展示・保管されています。

本誌68号や83号の当欄でも触れられていますように，実験機器の整備や常設展示は，何処の機関でも困難な状況であると思いますが，幸いなことに文教大学では人間科学に関する教育への効果が期待され，学生が自習やディスカッション等を自由に行うことができるスペースでの常設展示が実現しました。

さらに，古典的な実験機器が心理学の研究を行ううえで何故必要だったのかを理解してもらうため，文教大学では，授業の一環として，実験法の骨子を紹介した後に，さまざまな心理学実験が以前はどのように実現されていたかを示す例として，展示されている古典的実験機器の見学を行っています。

昨年度は，「心理学実験法」の講義の中で，展示物の中からカイモグラフとBergströmの振子型測時計の写真を事前に配布したうえで，装置の見学後にそれらを含む実験機器の用途に関する推測，展示されている機器の中で用途をよく知っている機器やその内容，さらに説明を受けて興味を持った機器について，小レポートを課しました。学生からの回答の中には，カイモグラフについては，パブロフの犬の実験の説明が展示機器に添えられていたものの，自動給餌器であるとの本来の用途とは異なる回答が見受けられ，さらに，振子型測時計に関しては，時間制御の機器であることと関連した回答は見受けられませんでした。この点は，機器の動作状態を実際に見ることができなかったことが一因であると考えられます。他にも，事前に写真を配布しなかった機器にもさまざまな回答があり，例えばゾートロープについては，スリット視の装置との関連を推測するなど，普段は触れない機器と心理学実験とのつながりについてさまざまな考えを巡らせる機会となりました。

その後の講義の中で機器の用途について説明をしたこともあり，講義後の感想では，現在のコンピュータを用いた装置を中心とした実験だけでは想像が難しい「実験において記録や制御の方法がいかに重要視され，これまでさまざまな工夫がなされてきたか」に関心を持ったことを伺わせる内容が見られました。ほかにも，ゾートロープと心理学とのつながりに関する学生の質問が，心理学史におけるβ運動に代表される知覚心理学研究の萌芽について授業中に解説する契機になったことなど，古典的実験機器の活用が，座学に終始しがちな心理学の研究法や心理学史の講義にアクティブな学びの側面を持たせる一助になることが示唆されました。

一方で，展示をしていることは知っていたものの，受講してはじめてこれらの機器に関しての詳細が分かり面白かったとの感想もあり，機器に興味を持ってもらえたことは嬉しい半面，展示に関してはまだまだ課題が残っていることを痛感した次第です。また，機器の動いているところを見たいとの感想もあり，このようなリクエストにも応え，教育的な観点からより有効利用できる展示へとさらに発展させ，将来的には，若い世代が心理学に興味を持つためのきっかけの一つとなることを目指したいと考えています。

日本心理学会のウェブページ **https://psychmuseum.jp/** もぜひご覧ください。

特集

公認心理師　現状と将来

心理職の国家資格化は，多くの心理学関係者にとって積年の願いでありました。その熱い願い，そして，それを実現するためのさまざまな活動とたゆまぬ努力が実を結び，2015年に公認心理師法が公布され，先の2018年9月，はじめての公認心理師試験が実施されました。この第1回の公認心理師試験では35,020人が受験し，27,876人が晴れて合格しました。その結果，ついに国家資格として認められた公認心理師が誕生することになったのです。

今回の特集では，出来たての国家資格，公認心理師について紹介するとともに，心理学に関わるさまざまな立場から，この資格に期待することをとりあげます。公認心理師という言葉は耳にしたが，よくわからないという方も，様々な領域がある心理学関係者全体の中にはいらっしゃることでしょう。そもそもこの国家資格はどのようなものなのか，どうやって資格が取れるのか，資格を持つと何が変わるのか，あるいは変わらないのか。生まれたての資格ですから，様々な疑問があるのは当然です。この特集を読むことで，このような疑問が少し解消できるかもしれません。多くの心理学関係者の強い願いが実を結び，誕生した公認心理師。その現状と将来像を探ってみましょう。

（大久保街亜）

公認心理師とは何か

東京大学大学院総合文化研究科 教授
丹野義彦（たんの　よしひこ）

Profile―丹野義彦
公益社団法人日本心理学会 公認心理師担当常務理事，一般社団法人公認心理師の会理事長，公認心理師養成大学教員連絡協議会会長を兼務。1978年，東京大学文学部心理学科卒業。1985年，群馬大学大学院医学系研究科博士課程修了。医学博士。専門は臨床心理学，異常心理学。著書は『公認心理師エッセンシャルズ』（共編，有斐閣），『心理療法がひらく未来』（監訳，ちとせプレス），『叢書・実証にもとづく臨床心理学』（共編，東京大学出版会）など。

公認心理師について，Q＆A形式でまとめながら，日本心理学会の活動をご紹介します。

Q　公認心理師とは何ですか？

A　公認心理師とは，「医師」「教師」「薬剤師」等と並ぶ本格的な国家資格であり，心理系では初の国家資格です。公認心理師の活動の目的は，国民の心の健康を保持し増進をはかることです。2017年9月15日に施行された「公認心理師法」にもとづいてできました。心理学関係者が長い間待ち望んでいた国家資格であり，日本の心理学の歴史においても画期的な出来事でした。

Q　公認心理師はどのような仕事をしますか？

A　心理学に関する専門的知識及び技術をもって，①心理アセスメント，②心理的援助（相談・助言・指導），③関係者への心理的援助，④心の健康教育（心の健康に関する知識の普及を図るための教育や情報提供）といった仕事を行います。

Q　公認心理師はどんな職場で働きますか？

A　おもな活動分野は，①医療（病院などの医療施設），②福祉（福祉施設），③教育（学校），④司法（裁判所や司法施設），⑤産業（企業）の五つですが，このほかにも多くの分野において国民の心の健康増進のために活躍しています。

具体的には以下のようなものがあげられます。

- 精神科クリニックや精神科病院での心理検査，心理療法，デイケア
- がんや心疾患，生活習慣病や難病など身体疾患へのチーム医療におけるメンタルケアや緩和ケア
- 疾病予防やメンタルヘルス向上のための心の健康教育（健康教育やストレスマネジメント）
- スクールカウンセラーなどの教育相談
- 不登校やいじめに悩む児童への学校適応支援や予防のための取り組み
- 進路相談やキャリアカウンセリング
- 発達障害を持つお子さんへの療育支援や発達相談
- 虐待を受けた児童への支援やその親への子育て相談
- 認知症や高次脳機能障害者など認知機能障害を持つ方やその家族への支援
- 職場のメンタルヘルス向上のための取り組みや休職者の復職支援
- 災害や事件の被災者への心のケア
- 触法者の再犯防止や社会復帰に向けた支援

Q　公認心理師になるにはどうすればよいですか？

A　国家試験である公認心理師試験に合格しなければなりません。受験する資格を得るためには，大学において法律で定められた25科目を履修して卒業したうえで，①大学院で法律で定められた10科目を履修するか，②定められた実習機関で一定の実務経験を積むことが必要です。他の国家資格に比べても，かなり学習の負担が大きく難しい資格であるといえます。

ただし，公認心理師法が施行された時に大学

や大学院に入学していた人には，履修科目が減免される経過措置が適用されます。また，公認心理師法が施行された時点で「心理職の業務」に5年以上従事していた人には，現任者としての経過措置（受験資格の特例）が5年間適用されます。

Q　公認心理師にはどんな知識や技術が求められますか？

A　公認心理師試験のブループリント（設計表）から，公認心理師に求められる知識や技術を明らかにすることができます。

表1の左側には，到達目標とブループリントの出題割合が示されています。ここからわかるように，過半数の61％を占めるのは法・制度・実務です。これはさらに医療・福祉・教育・司法・産業の5分野と，「公認心理師の職責」「関係する制度」に分かれています。一般に，専門資格というものは，活動する分野が限られているものです（例えば，医師は医療だけ，ソーシャルワーカーは福祉だけ，司法関係者は司法だけというように）。これに対し，公認心理師は5分野のオールマイティな知識が要求されるのです。

次には，基礎心理学（25％）が重視されています。また，心理アセスメント（8％）と心理的支援（6％）は，これまでの心理職が重視してきたものですが，合わせて14％にとどまり，意外に少ないという印象があります。

表1の右側は，それぞれの到達目標に要求される知識と技術をあらわします。国家試験の内容を加味してまとめてあります。

まず基礎心理学が重視されており，公認心理師にはサイエンスにもとづく知識や思考が求められます。次に心理アセスメントについては，測定にもとづくアセスメントに重点が置かれています。また，心理的支援については，国家試験の内容から見ると，これまで重視されてきた「受容にもとづく心理的支援」はもちろんですが，新たに「エビデンスにもとづく心理的支援」が重視されるようになっています。

法・制度・実務については，国家試験では，現場で実践を積まないと答えられないような細かい知識についての難しい問題が出されました。

公認心理師は心の専門家なのに，なぜ5分野の法・制度の知識が要求されるのでしょうか。第一には，多分野の専門家とチームを組んで仕事する能力が必要だからです。メンタルヘルスの専門家は，ひとりで仕事をするわけではなく，多職種連携で仕事することが定められています。多職種連携のチームにもとづく業務能力が必要なので，多分野の知識も要求されるのです。

第二に，公認心理師が5分野のオールマイティな知識を要求されるのは，多分野の専門家のコーディネーターとして活躍することが期待されているからです。このように「法・制度に強い公認心理師」が求められています。うまくいけば，メンタルヘルスを統括する行政官（公務員）としての就職先が開かれることになりま

表1　公認心理師試験のブループリント（設計表）と要求される知識・技術

到達目標		ブループリントの出題割合		要求される知識と実務
基礎心理学		25%		基礎心理学（サイエンスにもとづく）
心理アセスメント		8%		アセスメント（測定にもとづく）
心理的支援		6%		心理的支援（受容にもとづく） （エビデンスにもとづく）
法·制度·実務	医療	18%	61%	多職種連携（チームにもとづく） （法律·制度にもとづく）
	福祉	9%		
	教育	9%		
	司法	5%		
	産業	5%		
	職責	9%		
	制度	6%		
心の健康教育		2%		心の健康教育（予防対策にもとづく）

日本心理研修センターのホームページから一部引用

す。公認心理師の職種拡大という観点から，大きな可能性を秘めています。

以上のように，これまでの心理職が重視してきたことの他にも，公認心理師では多様な知識と技能が求められているのです。

Q　公認心理師はどんなカリキュラムやシラバスにもとづいて養成されますか？

A　国が定めた養成カリキュラムは，大項目が定められているだけであり，細かい項目は決められていません。カリキュラムにもとづいて授業を行うためには，教員が授業シラバスを作る必要があります。この指針となるように，日本心理学会は，2017年12月に，「公認心理師大学カリキュラム 標準シラバス」を作成し，ホームページで公開しました。

Q　公認心理師の養成大学はどのような課題や要望を持っていますか？

A　大学での公認心理師養成は2018年4月から本格的に始まりました。日本心理学会は，大学の学部・学科・コース等を対象として，「公認心理師養成についてのアンケート調査」を行い（回答数80校），ホームページで公開しました。

このアンケートの第1問は「公認心理師カリキュラムを実施するに当たって，不安や困難を感じていること」を尋ねました。最も強い困難とされたのは次の項目でした。

- 国家試験を合格した卒業生の就職先が確保できるか
- 大学の心理実習の実習先が確保できるか
- 大学院の実習先が確保できるか

つまり，大学・大学院と現場での実習先の結びつきに懸念があることがわかりました。公認心理師の養成のためには，大学と現場の公認心理師の連携が大切です。こうした調査結果が後述の「公認心理師の会」創設のきっかけとなりました。

また，基礎心理学への懸念もありました。

- 公認心理師カリキュラムにより基礎心理学教育のレベルが低下しないか

アンケートの第2問では「日本心理学会に望むこと」を尋ねました。最も要望が強かったのは，行政への働きかけでした。

- 養成大学の要望をまとめて5年後の見直しで官庁と交渉してほしい
- 公認心理師の病院での業務の診療報酬化を進めてほしい

次に強いのは大学間の情報交換への要望です。

- 養成大学の組織化をすすめ，大学間の横の情報交換を進めてほしい

さらに，学問体系や基礎心理学の重視の要望も強いものがありました。

- 国家試験出題基準（ブループリント）を実際の学問体系に合わせてほしい
- 基礎的な心理学を重視するように働きかけてほしい

以上のように，養成校では，①行政への働きかけ，②大学間の情報交換，③学問体系や基礎心理学の重視といった強い要望を持っています。

Q　公認心理師養成大学教員連絡協議会はなぜ作られたのですか？

A　上で述べたように，養成大学はさまざまな要望を持っているので，これらを実現するために，日本心理学会は，2018年3月に，「公認心理師養成大学教員連絡協議会」（以下，公大協）を発足させました。

公大協は，「科学者－実践家モデル」を重視し，日本心理学会の毎年の大会でシンポジウムを開くなどして養成のありかたを議論し，行政への働きかけをおこなう活動をしています。これについては鈴木先生の特集記事をご覧ください。

Q　科学者－実践家モデルとは何ですか？　なぜ公認心理師にとって必要ですか？

A　公認心理師になるには，前述のように，カリキュラムにおいても，国家試験においても，科学的な基礎心理学にもとづいて，その上に実践心理学の知識と技術を身につける必要があります。このように，科学と実践の両方を身につけるという方針は科学者－実践家モデルと呼ばれます。もともとはアメリカの大学院における実践心理学の教育理念として唱えられたもので

すが，今では世界標準の考え方になっています。具体的には，①心理学の基礎分野の知識を徹底的に習得する，②大学院において実践知識の習得のために多くの実習を体験する，③科学的な研究方法と，統計によるデータの評価方法を必須科目にすることなどを意味しています。公認心理師は，科学者としての客観的知識や探究心と，実践家としての技術や人間性の両方を兼ね備えた高度専門職業人をめざすので，科学者－実践家モデルの理念が必要となります。

Q　大学と現場の公認心理師との協力はどのように行われますか？

A　前述の養成大学のアンケート結果からも，養成大学と現場の公認心理師の密接な連携が求められていることがわかりました。そこで，公認心理師の資格を持つ公大協のメンバーが中心となって，2018年11月に「公認心理師の会」が創立されました。公認心理師のスキルアップとキャリアアップをめざす活動を行っています。公認心理師の会も「科学者－実践家モデル」を基本理念としており，公大協とは兄弟関係として，車の両輪として機能しています。2019年4月には一般社団法人となりました（図1）。公認心理師の方はぜひご入会ください。

Q　長期的には公認心理師にはどのような課題がありますか？

A　公認心理師制度の発展のために，いろいろな長期的な課題が考えられます。

- 専門分野の研修制度（公認心理師が各専門分野の知識と技術を深く学ぶための研修制度）
- 専門資格認定（医療公認心理師，教育公認心理師といった各専門分野の知識と技術を認定する専門資格制度）
- 診療報酬化（病院における公認心理師の業務を保険診療とすることにより病院での公認心理師の雇用を増やす）
- 就職先の確保（国民のメンタルヘルスを担当する多くの職種やポストに公認心理師が雇用されるように働きかける）
- 行政職への拡大（前述の「法・制度に強い公認心理師」はメンタルヘルスをコーディネートする公務員としての就職先を増加させる）
- 博士課程資格化（知識と技術をより深めるために，欧米のような博士課程の資格をめざす）

Q　公認心理師のモデルとなる制度はありますか？

A　世界のメンタルヘルスの専門家の間では，今世紀に入ってパラダイムシフトがおこり，価値観や方法論が劇的に変化しています。その最先端は，イギリス政府が2008年におこなった「心理療法アクセス改善」政策です。この政策では，うつ病や不安障害に悩む国民に対して，希望すれば無料で心理療法を提供しました。政府は多額の費用でセラピストを多数養成しました。これによって，2008～2013年に，38万人が心理療法を受け，その46％が回復しました（図2『心理療法がひらく未来』より）。

心理療法アクセス改善政策は，外国の話ではありますが，本当に必要なのは日本ではないでしょうか。日本は，先進国の中でも自殺率が高いことで知られています。日本でもこの政策をモデルとして，公認心理師が中心となって活躍できる体制が実現してほしいものです。

図1　「公認心理師の会」の設立記念講演会（河村建夫衆議院議員の祝辞）

図2　『心理療法がひらく未来』ちとせプレス

公認心理師の養成

早稲田大学人間科学学術院 教授
鈴木伸一（すずき　しんいち）

Profile―鈴木伸一
2000年，早稲田大学大学院人間科学研究科博士後期課程修了。博士（人間科学）。これまでに，国立精神・神経医療研究センター客員研究員，ロンドン大学精神医学研究所客員研究員，日本認知・行動療法学会理事，一般社団法人公認心理師の会副理事長，公認心理師養成大学教員連絡協議会事務局長などを兼務。専門は臨床心理学，医療心理学，行動医学。著書は『公認心理師技法ガイド』（共編，文光堂），『公認心理師養成のための保健・医療系実習ガイドブック』（共編，北大路書房）など。

公認心理師養成の概要

2017年9月に公認心理師法が施行になり，2018年4月より全国の心理学系学部および研究科において，公認心理師養成がスタートした。公認心理師法に規定されている必須科目は，表1に示す通り，学部では25の講義・演習科目および心理実習，大学院では10の実践的演習科目および心理実践実習が設定されている。各科目には到達目標とその科目に含まれるべき事項概要が示されているが，単位数や標準シラバスなどは示されていない。また，学部の心理実習と大学院の心理実践実習については，養成機関および実習現場における指導者の要件と実習時間は示されているが，どのような実習を行い，どのように評価するかといった実習の詳細に関する要件は今のところ規定されていない。

このような状況において，各養成大学・大学院においては手探りで養成カリキュラムの準備が進められているわけであるが，当然のことながら混乱が生じており，公認心理師養成における標準的な指針を早期に構築するべきであるという声が高まっていった。日本心理学会では，心理学の基幹学会としての社会的責任と，心理学教育の発展，さらには公認心理師教育の質保

表1　大学および大学院における必要な科目

大学における必要な科目			
A. 心理学基礎科目	①公認心理師の職責	②心理学概論	③臨床心理学概論
	④心理学研究法	⑤心理学統計法	⑥心理学実験
B. 心理学発展科目			
（基礎心理学）	⑦知覚·認知心理学	⑧学習·言語心理学	⑨感情·人格心理学
	⑩神経·生理心理学	⑪社会·集団·家族心理学	⑫発達心理学
	⑬障害者（児）心理学	⑭心理的アセスメント	⑮心理学的支援法
（実践心理学）	⑯健康·医療心理学	⑰福祉心理学	⑱教育·学校心理学
	⑲司法·犯罪心理学	⑳産業·組織心理学	
（心理学関連科目）	㉑人体の構造と機能及び疾病	㉒精神疾患とその治療	㉓関係行政論
C. 実習演習科目	㉔心理演習	㉕心理実習（80時間以上）	
大学院における必要な科目			
A. 心理実践科目	①保健医療分野に関する理論と支援の展開	②福祉分野に関する理論と支援の展開	
	③教育分野に関する理論と支援の展開	④司法·犯罪分野に関する理論と支援の展開	
	⑤産業·労働分野に関する理論と支援の展開	⑥心理的アセスメントに関する理論と実践	
	⑦心理支援に関する理論と実践	⑧家族関係·集団·地域社会における心理支援に関する理論と実践	
	⑨心の健康教育に関する理論と実践		
B. 実習科目	⑩心理実践実習（450時間以上）		

証の観点から，上記の問題点に取り組むべく，学会の公益事業の一環として2018年3月に，公認心理師養成大学教員連絡協議会（以下，公大協）を発足させた。

公認心理師養成大学教員連絡協議会の発足

公大協は，科学者－実践家モデルに基づく公認心理師育成をめざし，養成の質向上に向けてカリキュラム等の検討を進めている。併せて，各養成大学・大学院が抱える問題を共有し，相互の連携を図ることを会の基本理念として，以下のような活動を行っている。

1. 公認心理師養成大学における教育の質の向上のために，各養成大学が抱える諸問題を会員間で共有し（図1），会員相互の連携をもって問題の解決を図る。
2. 公認心理師の質保証および質の向上のために，学部および大学院におけるカリキュラム構成，各科目の標準シラバス，現場実習マニュアル等について，現状の問題点と改善すべき方向性を検討し，公認心理師制度の改定ならびにその後の制度運用に向けた具体策について，政策提言を行う。
3. 公認心理師法第二条にある「心理学に関する専門的知識及び技術をもって，次に掲げる行為を行うことを業とする者をいう。」というところの心理学に関する専門的知識及び技術に関する定義を明確にし，それが国家試験（各領域の出題割合や出題方法）に反映されるように政策提言を行う。
4. 公認心理師制度の根幹をなす心理学の学術的発展と，公認心理師の質保証に資する高等教育機関としての大学の在り方を検討する。具体的には，公認心理師制度の枠を超えて，次世代の指導者養成（大学教員や実習指導者）としての博士後期課程の在り方について検討する。
5. 公認心理師養成における地域格差や大学格差を是正するために，大学間連携（コンソーシアム，単位互換制度など）を推進するとともに，実習施設の共有化や資格取得者のキャリアディベロップメント支援のための全国規模でのネットワークを構築する。

公認心理師養成大学教員連絡協議会
メールマガジン
01
協議会の活動と予定
これまでとこれから
●これまでの歩み
●これからの予定
1

図1　公大協のメールマガジン

これらの基本理念・活動目的を達成するために，以下の委員会を設置し，各課題の解決のための具体策の検討を行っている。また，日本心理学会の年次大会に合わせて総会を開催し，各種委員会の活動報告を行うとともに，会員からの意見聴取，会員相互の交流，今後の課題等についての議論の場としている。さらに，日本学術会議の心理学・教育学委員会健康・医療と心理学分科会および心理学教育プログラム検討分科会，ならびに関連諸学会に対して加盟団体としての参画を依頼し，公認心理師制度に関する諸課題の解決に向けた情報交換や学術的支援，ならびに人材交流などを推進するための連携会議を設置している。

- 学部カリキュラム検討委員会
- 大学院カリキュラム検討委員会
- 現場実習検討委員会
- 国家試験検討委員会
- 編集委員会
- 広報委員会
- 企画委員会

そして，これら諸活動の年次報告として年報を発行し，公認心理師制度推進室や議員連盟を

はじめ，関連諸学会や日本学術会議等への配布を行い，公大協の活動の広報および公認心理師制度の在り方についての提言を行っている（図2）。

なお，公大協の会員は，個人会員および組織会員を基本としており，組織会員については，公認心理師養成に関わる大学の包括ユニットに限定せず大学学科，専攻あるいは学問分野（グループ）等の単位でも会員登録することができるようになっている。

公認心理師養成における現状と課題

各大学において手探りで始まった公認心理師養成であるが，各大学は大きな混乱や課題を抱えている。公大協としては，各大学の現状を把握し，今後の課題を明確にすることを2018年度の重要なミッションとして活動を行った。

具体的には，公認心理師養成大学へのアンケートを実施するとともに，公大協における「学部カリキュラム検討委員会」，「大学院カリキュラム検討委員会」，および「現場実習検討委員会」において現状と課題の分析を行った。以下は，各委員会がまとめたレポートの概要である（詳しくは，公認心理師養成大学教員連絡協議会2018年度年報を参照）。

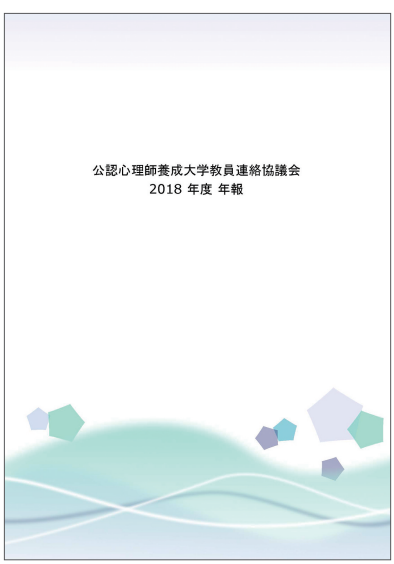


図2　公大協「2018年度年報」の表紙

ⅰ．学部カリキュラムの問題点と今後の課題

①「社会・集団・家族心理学」「学習・言語心理学」に象徴的に現れているように，ナカグロ（・）科目が多いことによって学部における心理学基礎教育の希薄化が進む可能性が高い。また科目あたりの時間数が明記されていないなどさらなる希薄化の余地を残している。さらに，心理学実験や心理統計にかかわる科目が少ない。

②現状の公認心理師制度の運用では，カリキュラムの認定は各科目ごとではなく，カリキュラム全体を一括した認定となっており，複数の大学がそれぞれの特徴や強みを生かして，コンソーシアムを構成してカリキュラムを組むということができない。比較的潤沢な教員を擁している大学のみが学部教育，大学院教育のカリキュラムに対応可能となる状況は，ますます大学間格差が進行すると懸念される。

③公認心理師制度における学部カリキュラムでは卒業論文が必須となっていない。卒業論文の重要性は，2014年9月30日に日本学術会議心理学・教育学委員会心理学分野の参照基準検討分科会の報告においても強調されている。卒業論文を作成することなしには，学部で学んだ心理学の知識や方法論を総動員して問題解決に当たるという機会はなく，この機会をなくすことは学部教育の質の低下を招くと懸念される。

④「公認心理師」カリキュラムによって各大学のカリキュラムが画一化されてしまい，各大学の特色が失われる危険性がある。

⑤心理学研究者の養成は日本の科学水準の維持と向上にきわめて重要である。大学院教育が公認心理師の資格取得のための教育に傾倒していく状況において，研究者養成のキャリアパスの確保をどのようにするか議論していく必要がある。

ⅱ．大学院カリキュラムの問題点と今後の課題

①公認心理師制度において大学院における心理実践実習の進め方に関する具体的な規定がないために，「大学院の実習先が確保できるかどうか」，「実習の巡回指導を実習担当教員でカバーできるかどうか」，「大学院の実習を担当する大学院教員が確保できるかどうか」といった，大

学院教育の中で効果的な実習を行うための体制づくりに関する懸案点が多く指摘された。また，各大学が個別に実習先を開拓する状況が進んだ場合，大学側も実習先側も事務的なコストが大きくなり，実習先での現場指導を大学側がどのように担保できるかという問題も重なり，実習の中での実践教育の質の保証が危惧される。

②大学院教育において，身につけるべき臨床技能の内容とその評価方法が不明であるという問題点が指摘された。また，それらを大学と実習先とでどのように連携しながら行っていくのかという課題である。

③大学院博士後期課程の位置づけに関する課題が指摘された。科学者－実践家モデルに基づく公認心理師の養成を考えると，今後の臨床研究の充実や発展は重要なポイントである。その中で，大学院博士後期課程をどのように位置づけるかについての議論が必要である。

④大学と地域の連携の重要性が指摘された。実習先に依頼する実習内容や実習の評価方法が大学間で異なると，実習受け入れ先機関の指導担当者にかかる労力が多大となり，現場実習指導者に大きな負担がかかることとなる。各大学と実習受け入れ先機関がともに実習内容を検討し，均てん化を図ることによって実習指導担当者の負担を軽減することが可能である。徳島県では，4大学の医療機関実習担当教員と約10施設の医療機関実習担当者が一堂に会して「医療機関実習担当者会議」を毎年開催し（平成30年度は複数回開催），医療機関から大学への要望と大学から医療機関への要望の共有，各医療機関に共通した指導内容の検討，実習評価票の作成，についての協議を行っている。これらの成功事例を参考にしながら，大学における実習指導ガイドラインの策定が必要である。

ⅲ．現場実習の問題点と今後の課題

①実習先の確保については，「現場の負担」，「他大学との関係」，「分野ごとの調整」，「実習内容」の観点から課題が挙げられた。

②実習指導者の選定については，「現場実習指導者の職務・資格要件」，「現場実習指導者および実習内容の質の担保」などの課題が挙げられた。

③実習内容については，「主担当ケースの運用が困難な施設が多い」，「実習先の指導方針と，大学の指導方針のすり合わせが難しい」などの課題が挙げられた。

④巡回訪問については，「巡回訪問の頻度について教員の負担が大きい」，「巡回指導で何をやるべきかが不明確である」などの課題が挙げられた。

⑤実習時間のカウントについては，「学生間，大学間で実習時間の捉え方が異なっている可能性があり，カウントの仕方について統一した基準が必要である」，「事前・事後指導において何をどこまで行うべきかが明確ではない」などの課題が挙げられた。

⑥スーパーヴィジョン（SV）のあり方については，「何を目的として，どのような技能や知識を身につけさせることがあいまいである」，「学外実習のSVを学内教員が行うことへの倫理的問題」などの課題が挙げられた。

そして，これらの問題点を踏まえ，現場実習ガイドラインの策定が急務である。

公認心理師養成の今後

これまで述べてきたように，各大学・大学院における公認心理師養成は混乱の渦中にある。養成システムを成熟させ，公認心理師の質の向上を図り，さらには心理学の学術的発展を実現するには，心理学の基幹学会としての日本心理学会や心理学関連諸学会が，公認心理師の養成機関，さらには現場実習を行う主要5分野（保健医療・教育・福祉・産業労働・司法犯罪）の諸施設と連携を取りながら，標準カリキュラムと実習ガイドラインの策定を進める必要がある。そのハブ的な役割として公認心理師養成大学教員連絡協議会の役割は重要であると考えられる。公認心理師制度の枠組みづくりを行政に委ねるだけでなく，心理学教育を担う当事者としての問題意識と改善のためのたゆまぬ努力が重要であると考えられる。

スクールカウンセラーとして公認心理師に期待すること

専修大学人文科学研究所 特別研究員
石川健太（いしかわ　けんた）

Profile―石川健太
2015年，専修大学大学院文学研究科心理学専攻博士後期課程修了。博士（心理学）。専修大学心理教育相談室相談室員，東京都公立学校スクールカウンセラーなどを兼任。専門は臨床心理学，認知心理学。

本稿では教育現場，特にスクールカウンセラー（以下SC）において，その養成や研修体制に着目し，私の体験を振り返りながら現状と将来について考えていきたい。

私がSCと初めて接点をもったのは大学院生の頃，支援員として中学校に通うようになってからである。当時，私が支援員として通っていた学校は，非行傾向の子どもが目立ち，教職員は生徒間の問題行動への対応や保護者への対応に追われ，学校全体が疲弊しきっているようであった。このような環境のなかで，SCはいったい何ができるのか。当初はそうした想いを抱かずにはいられなかった。しかし，SCのIさんと関わるにつれて，このような思いは徐々に変わっていった。

Iさんは，常に誠実で公平な方だった。非行傾向がある生徒にも真摯な態度で向き合っていく姿は，子どもだけでなく保護者や教職員からも信頼されていた。Iさんは，私を生徒や保護者との面接への陪席，家庭訪問の同行などに誘い，その時の私の考えや振る舞い，あるいは見立てについて，厳しくも優しさに溢れた言葉をかけてくれた。Iさんとは三年間同じ学校で関わり，SCが果たすべき役割やその意味について，沢山のことを教えていただいた。個人やその人を取り巻く人々だけでなく，学校という組織に対する見立てや支援という観点は，Iさんから教わった大切な視点の一つであると感じている。

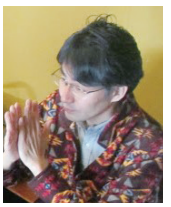
Iさんのような経験豊富なSCから指導を受けることができたことは，非常に幸運であった。大学や大学院における臨床心理士，公認心理師のカリキュラムでは，SCの実践的な教育を受ける場は少ないように感じる。特にSCの指導の下，学校で実習経験を積むことができる場は非常に限られているのではないか。なぜなら，SCの多くは非常勤として，週に1日，ないし数日のみ勤務しているため，実習生への指導やその責任をSCが負うことは，現実的に難しいからである。全国の公立・私立学校において，多くのSCが活用されているものの，SCの実習経験を積む場は十分に確保されているとはいえないのが現状である。

心理職において，初の国家資格である公認心理師に期待することの一つが，SCの教育や研修制度の充実による専門性の向上，SCへの支援体制の拡大である。前述したように，現状ではSCに関わる教育は十分に整っているとは言えない。児童，生徒が抱える問題や症状など，個々の事例に対する見立てや介入方法などは，カリキュラムのなかで取り上げることはある。その一方で，学校という集団，あるいはコミュニティに対するアプローチについて学ぶ機会は少ないように感じる。こうした方法を学ぶためには，集団をどのように見立て，支援していくかという集団精神療法的な観点を，講義のなかに取り入れていくことも役立つかもしれない。

研修制度については，現任者向けの全国研修会や各都道府県の教育委員会が実施するものがある。これらの研修会では，情報交換や事例検討を通じてSCとしての悩みを共有し，新たな気づきを得ることができる。その一方で，経験を積み，専門的な訓練を受けてきたSCによるスーパーバイズやマネジメント体制は，十分に整備されているとは言えない。公認心理師の職責のなかには，生涯学習，自己研鑽，相互研鑽が明記されている。SCに対する継続的なスーパーバイズなどの体制を整備していくことは，経験の浅いSCだけでなく，経験豊かなSCにとっても，公認心理師としての職責を果たすことに繋がると考える。国家資格となった今，各都道府県の教育委員会や公認心理師の職能団体などが連携し，こうした研修会など，SCの支援体制の充実を図ることも必要なのではないか。

SCへの支援体制を整えることは，SCの精神的健康を支える上でも重要であろう。SCの多くは非常勤であり，その生活基盤は非常に不安定である。このような立場で仕事を続けていくことの苦しさは，多くのSCが感じていることであろう。こうした状況でも，私がSCを続けることができているのは，これまで関わってきたIさんや教職員の方々，研修などで同じ悩みを共有する仲間がいたからこそだと感じる。こうした体験ができたことはある意味で，幸運なことであったとも思う。今後，公認心理師がSCとして活用されるようになっていくであろう。その時，SCとなった人が，こうした体験を当たり前のように経験できる体制が今後，整っていくことを期待している。

子どもの心理臨床と公認心理師



公立教育相談センター 相談員
藤原真一（ふじわら　しんいち）

Profile―藤原真一
専門は臨床心理学。公立学校でのスクールカウンセラーも兼任。大学院修了後，臨床心理士として教育領域での心理臨床に従事。不定期で企業の人事関連のアセスメントも行っている。公認心理師はGルートで受験。

まず教育臨床の分野に入った経緯から書くことにしよう。

大学院を卒業してから現在に至るまでこのフィールドにいる。子どもの臨床にことさら惹かれてというわけでも，不本意ながら……というわけでもなく，成り行き，たまたま，偶然である。偶然と言っても運命的な色彩はかなり乏しく，いくつかの出会いには恵まれたが現在まで至る道のりは大方散文的なものであった。

次にこの分野について簡単に紹介する。対象の多くは18歳くらいまでの子どもとその保護者である。主訴は一貫して不登校が最も多い。学業不振や落ち着きのなさ，発達上の問題，育てにくさ，情緒の問題などの他の主訴もあるが，不登校にはそれらの主訴の終着駅といった側面もあるように思う。業務の主な内容はアセスメントと面接，それに連携である。

アセスメントでは知能検査の要求が年々増えてきている。この傾向は当面弱まるようには思えない。知能検査の価値は否むべくもないが，Wechslerが言うようにあくまでも知能はパーソナリティの一部であるからできるだけその子の全体像が反映されるようなアセスメントをと心がけている（経済性の面で限界はあるけれども）。

子どもの臨床の特徴は相手が子どもだということだ。彼らとの面接の媒体は言葉であったり遊びであったり，大概の場合はその両方である。子どもたちは常に若いので，彼らを相手にする臨床家は子どもの心性を保ち続け易い（childlikenessだけではなく，childishnessも含まれてしまうのは残念であるが仕方ない）。他方で彼我の年齢差は開くばかりなので老いを意識することもまた多い。もちろん哀しくはあるのだけれど，容易に統合されないこの矛盾はなかなか面白い。子どもの臨床の魅力のひとつだろう。

連携は特に教員とのものが多い。次が福祉職である。同じ対象（子ども）に関わる職種とはいえ，捉え方やアプローチは違う。そのため異業種とのやり取りには幾分芝居っ気が必要になる。しかしこれがどうも難しい。場数はそれなりに踏んだはずなのだが舞台慣れには程遠い。言葉を発するといかにもセリフ然としてしまうか縺れてしまうことが多い。以前よりはややましになったが，思わぬ失策行為にしてやられることはちらほらある。

さて，ここからは公認心理師に期待することを書く。

長年，臨床心理士として働いてきたが，そこで求められてきたことと公認心理師として求められることとの間に大きな違いがあるようには思えない。もちろん待遇等で良い方向に転がることは希望しているが，世の中の人々が心理の人間に期待すること，そしてその期待の程度はこれまでこの仕事に携わってきた人たちに向けられたものと大きくは変わらないだろう。

ではそうした期待に応えるために必要なことはなんだろうか。自分ならどんな心理にみてもらいたいかと自問するとそれは明確になる。弱っている時に望んでいるのは安心と希望を与えてくれることであり，それをあてにできる善意である。この原稿で求められているのは感傷を排した，専門家としての意見だとは思うし，善意だけでは不十分であることは重々承知している。しかし，種々の思想や技法，診断名の消長を想うと，まずはより確実なものを強調せざるを得ないのである。幸い，これまで見てきた幾人もの同業者は，相当量の善意の持ち主であった。生きていく上でも，またこの仕事を続けていく上でも必要となる信頼感を得ることができたのである。

善意の次に来るのは現実感覚である。生活知や人間知とも言える。教養と言っても大きく外れないとは思うが，洗練された上質な部類の常識と言ったほうがしっくりくる（私見だが善意よりも現実感覚のほうが希少である）。心理の人間として「常識」や「生活」，その他それに類する言葉が持つ無神経さや権力性，抑圧性にはセンシティブでなければいけないとは思うが，クライアントの利益を考える時にそれらを抜きに考えることはできないのである。

専門性と言ってまず連想される学知はこれらの基盤に立たなければ無力である。これは資格の名称が何であれ変わらない。

残念なのは善意にせよ，現実感覚にせよ，制度化されたプログラムによる育成にはなじみにくいということだ。他方で経験と年齢を重ねることでおのずと身につくものでもない。現在のところ，見出した答えはそれぞれその都度のものと心得，自己との対話を続けていくことのほか道は思いつかない。

臨床と基礎との連携をもとめて

大見山クリニック 臨床心理士・公認心理師
吉田恵理（よしだ　えり）

Profile―吉田恵理
2017年，聖心女子大学大学院文学研究科人間科学専攻博士後期課程修了。大学や短期大学での非常勤講師と，都内小学校での特別支援員を兼任。専門は臨床心理学，認知心理学。研究テーマは「先延ばし」について。

私が心理職という仕事に初めて興味を持ったのは中学生の頃であった。両親が教師という環境で育ち，自身も学ぶことや他者に教えることが好きであったため幼い頃から漠然と教師になりたいと思っていた。しかし，中学校教諭である父の話を家で聞き，学校で起きている様々な出来事について自分達生徒だけではなく先生や周りの大人も色々と考えたり行動したりしてくれていること，それには専門の知識および専門の知識を持つ人のサポートが必要であることを知った。そして「人の教育に関わる仕事は教師だけではない」「人のこころについて専門の知識を持つ人が多くなれば先生も負担が減るのではないか」という考えを持つに至ったのである。

大学進学時は臨床心理学への関心が主であったが，いざ専門課程に進んでみると尊敬する先生との出会いや基礎心理学，特に認知心理学の面白さへの気づきがあり，基礎心理学を臨床心理学にどう活かすかに関心を持った。そのため学部から博士後期課程まで基礎心理学のゼミに所属し，博士前期課程では臨床心理学を学び，現在は臨床心理士として医療機関や教育現場で臨床活動を行っている。主な仕事内容としては，精神科クリニックでの予診面接およびカウンセリング，様々な特性を持つ子どもたちの学習面や学校生活のサポートを日々行っている。

そのような経緯を持つ私は，心理職がついに国家資格として認められると知った時にとても嬉しかった。理由は大きく三つある。一つ目は国家資格化に伴い心理職の存在がより広まり，何を専門にしているか，どのようなサポートを提供できるかが他職種の方々にも認知されればさらに援助の幅が広がると思ったこと。二つ目はそれに伴い心理職の立場が向上すると思ったこと。そして三つ目は，心理学の中で基礎領域と臨床領域が相互に関わり理解が深まる，つまり基礎領域の知見や専門家が臨床領域やその活動において現在よりも重要な意味を持つのではないかと思ったことである。実際に公認心理師試験の受験資格についての発表を目にしたり，試験を受けたりして（些か疑問に思う部分もあるものの）上記の三点については期待を持ち続けている。

特に，基礎領域に明るい資格となることを期待したい。昨今は顕著に基礎研究の成果を臨床領域，ひいては社会に還元することが求められる風潮が強くなっているように思う。実際，基礎領域の学会発表や論文にも「臨床応用」の四文字が目立ち，記憶の研究者はADHDやASD等の発達障害の病態の解明に関心を寄せていたり，情動の研究者は不安障害や摂食障害の治療に活かせる知見を発表していたりと，臨床領域への関心が高まっているように感じる。

一方，現在臨床領域で活躍する心理職が基礎研究に関心を持っているかというとやや異なるように感じられる。人間のこころや行動は非常に複雑であり，統計的手法や客観的測定といった科学的な手続きによって個人の援助を行うことは直接的には困難であるかのように思われる。しかし，「科学的」であることは目に見えないこころを扱う心理学にとって最も重要なことであり，最大の武器であると考える。心理職以外，例えば医師や看護師も心に対する働きかけを行う。しかし，心理職が行う心理療法は，やはり心理学的知識，それも積み重ねられてきた基礎領域の知見を含む知識に支えられていることが大切であると思う。人間のこころに寄り添うために必要なのは，目の前のクライエントと向き合うということだけではなく，科学的な側面を持つ心理学の知識を持ち，それを活かすこと。そして心理学が社会に貢献できることを示すということがますます大切になっていくと感じている。

こころの問題はその背景，深刻度も実に多種多様であり，関わる援助職もまた多種多様である。私も毎日様々な立場のクライエントの様々な問題に耳を傾けており，多職種連携の必要性も痛感している。こうした問題に心理学が貢献する上で，まずは臨床と基礎とが「多職種連携」を行い，公認心理師資格の基盤，ひいては心理学の未来を作っていければと思う。

……この上ない機会なのでもう一つ，心理職の待遇についてもこっそりと主張しておきたい。今後ますます幅広い知識を求められることになるであろう心理職にとって，有料の研修やセミナーで研鑽を積むことは必須である。しかし（若手世代は特に）心理職の生活基盤は安定しているとは言い難い。国家資格化に伴い，待遇改善についても是非期待したい。

総合病院におけるコンサルテーション・リエゾン活動の実際

自治医科大学附属さいたま医療センター 公認心理師
馬場知子（ばば　ともこ）

Profile―馬場知子
2009年，上智大学大学院総合科学部心理学研究科修士課程修了。国立がんセンター東病院や国立がん研究センター中央病院での心理療法士としての勤務を経て，2012年より現在の職場に勤務。

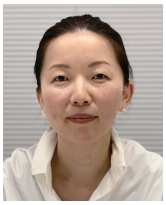
昨年公認心理師の試験を受けるべく研修を受けた際，参加者同士のワークの中で仕事の内容を紹介すると「へー，そんな仕事もあるんですね！」と言われた。まだまだ心理職の世界ではマイナーな業界なのだと実感したが，一般医療における心理的なケアのニーズは高い。平成26年度厚生労働科学特別研究事業「心理職の役割の明確化と育成に関する研究」報告書によると，全国の一般病院のうち心理職を常勤雇用しているのは約3割だが，公認心理師の誕生によってその割合はさらに増えることが期待される。先の調査では，医療チームへの参加やコンサルテーション・リエゾン活動（以後CL活動とする）をその業務内容として約70パーセントの心理職が挙げている。CL活動とは身体疾患をもつ患者の心理学的な問題に対応するものであり，筆者の業務の中心になっている。筆者は精神科には所属せず，すべての診療科からの依頼を受けている。日々関わる患者のもつ身体疾患は循環器疾患や悪性疾患，神経難病などさまざまであり，主治医から依頼がある場合もあれば，看護師から相談を受けることもある。依頼内容は，心理状態，知的および認知機能の評価や患者家族の意思決定支援，長期にわたる治療の中での心理的サポートや集中治療領域での危機介入など多岐にわたる。精神科医師との連携は必須であり，より精神的に重症であったり急激な変化があったりする場合には速やかに精神科医師に連絡をとり対応を依頼している。筆者は緩和ケアチームの一員としても活動しており，医療者向けの勉強会や患者同士の交流会を運営しファシリテーターとして参加したり，講義をしたりすることもある。

入院中の患者はたいていの場合大部屋で過ごしている。身体状況として許されるのであれば別室を確保して面談するが，難しい場合にはそのまま大部屋で面談をすることもある。時には，車いすを押して敷地内を散歩しながら話をすることもある。面談で得られた患者に関する情報や心理師としてのアセスメントは直接，あるいはカルテ記録を通して間接的に，患者にかかわる多職種と共有する。患者の治療やケアに関するカンファレンスは定期的に開かれているため，そこに参加し心理師としての見立てを伝えることもある。多職種が患者の心理社会的な側面について理解を深めることは，より患者にとって苦痛の少ない，患者の価値観に添った治療やケアにつながると考えている。

CL活動における介入の特徴の一つは，患者が心理師と会う時，患者のニーズがそれほど高くない場合もあることである。「落ち着かない様子でなんだかおかしいんです」，「本人はそこまで希望していないのですが，とりあえず一度話をしてみて，と伝えています」といった一報が入ることもある。何がそこで起こっているのか，どこにニーズがあるのか，誰がどのような期待をしているのか，といったことについてもアセスメントを要する。また，患者に直接会わずに，医療者と対応について話し合うだけの場合もある。どんな場合でも患者の気持ちに添いつつ，今この人にとって一番必要なことは何かを常に考えるようにしているが，そのためには心理学やカウンセリングに関する知識だけでなく，身体疾患に関する知識や病院という組織に関する知識，生命倫理，公衆衛生などについても知っておかなければならない。CL活動で関わる患者にとって最も重要なことは身体的な治療をできるだけスムーズに行うことであり，そのサポートをすることが，ほかの医療者と同じく心理師にも求められていることなのである。

公認心理師の養成カリキュラムでは医療現場での研修が必修となり医学に関する教育も以前より充実するものと思われる。しかし与えられた時間で得られる知識や経験は現場で働くために必要十分なものとは言い難い。病院で働く多くの職種が同じ職種の先輩に日々教えてもらう環境にあるのに対して，心理職は一人職場であることが少なくない。個人が様々な媒体を用いて学習し知識を得て経験につなげていく努力を継続していくことが重要であり，またそれを後押しするしくみも必要と思われる。総合病院精神医学会やサイコオンコロジー学会では他職種とともにCL活動について学ぶ機会があるし，同じ領域で働く心理職の勉強会もいくつか存在する。また，病院内においても他職種から学ぶことは多くあり，いつも助けてもらっている。知ったかぶりをせずに教えてもらう姿勢が大切だと肝に銘じている。

チームで組織と個人を支援する



SOMPOヘルスサポート株式会社
田上明日香（たのうえ　あすか）

Profile―田上明日香
リクルートグループでの社会人経験を経て，2005年に早稲田大学大学院人間科学研究科人間科学専攻修士課程に入学。2011年に同専攻博士後期課程修了。同年より現職。2013年より早稲田大学で非常勤講師を兼任。

産業領域での心理職の働く立場とその役割

産業領域で心理職としての専門スキルを活かした働き方は，二つの軸で整理できるのではないかと考えています。一つ目が事業場内と事業場外のいずれの立場で関わるか，二つ目が会社と連携をしながら個人と組織の問題解決のサポートをする立場で関わるのか，会社と連携しない安心感を重視とする個人支援の立場で関わるのか。産業領域に関わる心理職の働き方は，このいずれの立場で関わるかによって，求められる役割と実務で経験する内容は異なると思います。

事業場外資源として個人と組織の問題解決をサポートする

私は，社外の専門家として，個人と組織の問題解決のサポートをする立場で産業領域に関わってきました。ベンチャーから数万人の規模の会社まで，産業領域での心身の健康づくりを担う産業保健体制は，会社ごとにかなり異なります。また同じ会社であっても，本社と支社などの産業保健体制のリソースは大きく異なっているのが現状です。そのような中で不足している役割を補うために，会社の中で人事労務担当者や産業保健スタッフ（産業医や保健師・看護師等）や，現場の健康管理を担う管理職のみなさんが，どのように動いていくと連携がとりやすくなるのか，対応が必要な事例などを通して，体制を整えていくことも仕事の一つです。そのためには，会社に義務づけられている法令遵守の観点で，何の対策を優先的に整えていかなければいけないのかといった知識や会社の人事制度のような会社内の規則などの基本的な考え方，さらにはここ数年で認知度が高まってきている健康経営のような経営の視点から健康増進に取り組む際の考え方など，組織の心身の健康づくりに関するさまざまな視点を理解しているというベースが重要であると感じています。

個人と組織に関わるということ

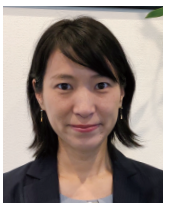
メンタルヘルス不調の従業員の方の個別の支援においては，組織の課題が大きい場合など，個人のセルフケアだけでは対処が難しい事例があり，個人と組織へアプローチすることの重要性を感じます。さらに専門職間の連携においても，本人の同意をとったうえで，社内の人事や産業保健スタッフや管理職，社外の主治医など，さまざまなリソースが連携することで個人と組織へのアプローチの対応の幅が広がることがあります。そして，これらの連携の際に産業領域で重視される特徴的な視点として，従業員が職場で安全で健康に働いてもらうために，職場で顕在化している状態像をとらえる「事例性」といわれる視点で整理し，そのうえで（職場で対応可能な範囲の）配慮を考えていくという考え方があげられます。

公認心理師の活躍のために

今後，産業領域で働く公認心理師の活躍の場についてのポテンシャルは，私が経験してきたような立場の支援にもありますし，それだけでなく経営的な視点でも，心身共に健康的な生活習慣を身につけ長期的に生産性高く働ける人材を確保することが重要視されるなか，健康な（生活）習慣への行動変容のサポートなどへの関心も強まっていると感じます。このように，心理職が貢献できる領域は広いと思いますが，産業領域の就職の採用基準には産業領域の実務経験が求められることが多く，最初の実務経験を積める場所が少ないことから仲間が増えにくい状況にあります。そのような状況を少しでも改善するために，今年から私の所属する企業では1年間に渡るインターンシップの受け入れを開始して，実務経験に近い体験ができるような取り組みを試行錯誤で始めたところです。微力ながら，このような取り組みを重ねることで少しでも産業領域で働く仲間が増えることを願っています。

インターンシップの様子。架空の具体的事例をテーマに心理職としての対処を議論。

外部 EAP 機関における役割



株式会社ヘルスウエイブ
馬ノ段梨乃（うまのだん　りの）

Profile―馬ノ段梨乃
2011年，東京大学大学院医学系研究科精神保健学分野博士課程修了。博士（保健学）。同年より現職。産業精神保健，職場のメンタルヘルス，復職支援に従事。京都府立医科大学大学院医学研究科で客員講師を兼任。

労働者の健康管理

職場でいきいきと働くために必要なことは何だろうか？

毎日のニュースをみると，某有名企業での自殺や，パワハラ・セクハラ事例，薬物使用や暴力・痴漢等の犯罪など，「いきいき」からは程遠い話題がたくさん流れてくる。では，このようなマイナスの状態（またはそれらに関連する要因）がなくなれば，職場でいきいきと働くことができるのだろうか？

「仕事のストレス」を含めて職場の不満足に関わるマイナス要素は「衛生要因」と呼ばれ，人事や安全・衛生の現場で使用されてきた。いきいきと働くにはマイナスがなくなればOKというわけではなく，さらに他の要素（達成感や周囲からの承認，等）も必要になる。それらは「動機づけ要因」と呼ばれ，満足感を高める要素として重要とされる。

現在，私は「外部EAP（Employee Assistance Program：従業員援助プログラム）」という企業向けメンタルヘルスサービスを提供する会社に勤務している。「外部」とは，企業との契約のもと，社外窓口として相談できる機能をもつ組織を意味する。基本的には，衛生要因，動機づけ要因のそれぞれに働きかけることで，従業員一人ひとり，さらには組織全体の「いきいき」を目指す。具体的な業務は対面でのカウンセリング，電話／メール相談，会社担当者（産業医や保健師，看護師，人事総務担当者，上司）へのコンサルテーション，メンタルヘルスに関わる教育研修やアンケート調査の実施などで，扱う内容は休職・復職者支援から組織の活性化対策までさまざまである。

組織のメンタルヘルス対策

組織のメンタルヘルス対策については各種指針やガイドラインが公表されている。具体的には，①組織としての方針を明確にしたうえで，②計画に基づく四つのケア（従業員一人ひとりの「セルフケア」／管理監督者による「ラインケア」／事業場内産業保健スタッフによるケア／事業場外資源によるケア）を推進することが重要とされる。また，2015年12月より従業員数50名以上の事業場に対して「心理的な負担の程度を把握するための検査（いわゆるストレスチェック）」の実施が義務づけられた。組織のメンタルヘルス対策を後押しする法的枠組みといえる。産業現場で働く心理職はこれまで「心理相談員」という立場で関わることが多く，法的に明記されたものではなかったが，公認心理師の国家資格化により，医師，保健師，看護師，精神保健福祉士に加えて，公認心理師もストレスチェックの企画→実施→評価等を行う「実施者」として役割を担うことが可能となった。

産業現場で働く心理師の課題

労働契約法第5条には「労働者がその生命，身体等の安全を確保しつつ労働することができるよう，必要な配慮をするものとする（安全配慮義務）」という項目が明記されている。会社は社員の不調に早く気づいて適切に対処することが求められる。特に休職や復職に関わる事例は個人の生活（経済的問題や人生設計）に直接関わるため，その判断はとても難しいものになる。たとえば，復職を希望する社員に対して，主治医は「生活するうえで支障となる状態（症状の出現）はないか」という基準で判断するが，会社は「継続的かつ安全に業務を行うことが可能かどうか」という安全配慮義務の観点から判断することになる。生活上の問題が解決したとしても，職場で必要な体力や集中力が十分に回復していない場合もあり，両者の見解は必ずしも一致するものではない。しかし，職場復帰の最終判断は会社が責任を担うため，場合によっては復職したいという本人の希望に添えないケースも見られる。

職場のメンタルヘルスを進めるにあたって関係者間の連携は最も重要なテーマといえる。この点に関して，公認心理師法第42条第2項には「心理に関する支援に係る主治の医師がある場合に，その指示を受ける義務」が規定されている。EAPの立場では本人が職場で十分にパフォーマンスを発揮できるよう支援することが求められるため，会社としての判断も尊重する必要がある。会社と主治医との間で意見が分かれたときにどのように進めていくか，運用面での整備はこれからという段階といえる。

新たな枠組みとして心理師の立場が明確になったことは産業領域で働く専門職にとって一つの変化となるが，その役割は今後も変わりゆくものではないかと考える。

実践に活きる公認心理師の基礎力

専修大学人間科学部心理学科 専任講師
松嶋祐子（まつしま　ゆうこ）

Profile―松嶋祐子
2005年，法務省宇都宮少年鑑別所に法務技官として入職。2016年，南イリノイ大学大学院犯罪学及び刑事司法専攻修士課程修了。2019年，国際基督教大学アーツ・サイエンス研究科博士後期課程中退。同年より現職。

筆者は，昨年度まで法務省の鑑別技官であった立場から本記事を執筆しているが，あくまで私見である点や，司法・犯罪領域はそれぞれに独自性が強く，他機関の心理士とはまた意見の相違があるであろう点，ご了承いただきたい。

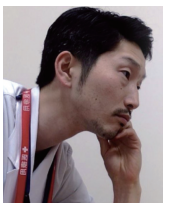
司法・犯罪領域で勤務する場合の多くは公務員であり，身分や役割が保障されているため，直接的には公認心理師資格がこれまでの業務に変化をもたらす動きはないが，筆者としては専門家としてのレベルの向上という側面で心理職の国家資格が創設されたことに大いに期待している。これまでも，多くの法務技官は，業務上必要とされる場面がなくとも自発的に臨床心理士を取得していたが，民間資格であるゆえ心許ない感じがあった上，心理士やカウンセラーという語は誰でも使用することができたため，心理職の事情に詳しくない方からすると，一体心理士とは何者なのか概念化しにくかったであろう。国家資格ができたことで，心理士にようやく実体が与えられた感があり，これにより心理職がポジションを得て，安定してその役割を担える土台がようやくできたといえる。

具体的なカリキュラム内容としては，基礎心理学系の履修科目が多いことが挙げられる。裁判官を中心として法律に基づいて思考がなされる業界において，心理士も，論理的で，エビデンスを示せる思考を持つべきであると筆者は考えている。司法・犯罪領域で働いているからには，アセスメント所見にしても，法律をバックグランドとしている人たちが納得できるような論理構成，表現で提示するべきであろう。少年鑑別所における法務技官の主な業務は，鑑別結果通知書というレポートを家庭裁判所宛てに提出することであるが，読み手側の中には，法務技官の所見よりも，教育職である法務教官による行動観察のほうが，客観的で信用できるとの声が以前からあると聞いている。これは法的な判断の材料にするには，法務技官側の文書が，信ぴょう性の乏しい書き方になっていたのかもしれない。他の専門家にも納得できる文書を作成するには，臨床の力のみならず，科学者としての基礎力が必要である。さらに特筆すべきは，心理職の科学者・実践家モデルは以前から言われているところではあるが，2017年に閣議決定された再犯防止推進計画において，「再犯の実態把握や指導等の効果検証及び効果的な処遇の在り方等に関する調査研究」が掲げられるなど，組織レベルで，実際的に調査・研究スキルが要求されるようになってきている。

また，これはどの領域の心理士でも同じことが起きてくると思うが，中堅以上の立場になると，複数の問題を抱える難しいケースを担当する機会も増え，他職種・他機関連携が求められる場合も少なくない。こうした中，医療の知識は，どの領域で働くにしろ心理士の基本になるので，機会があるうちに学習すべきである。特に医療機関での実習については，卒業してしまうと個人で機会を得るのは難しいが，公認心理師カリキュラムでは医療機関での実習が必ず含まれている。

ここまで司法・犯罪領域で働く心理士の質の向上という点で述べてきたが，他領域の心理士が司法・犯罪領域について学習する機会が増えるという点でも期待している。司法・犯罪領域は，犯罪者・非行少年は，犯罪をした，非行を犯したという行為の結果から司法機関が関与することになっているだけであり，背景にある問題は実にさまざまで，心理士が働く全領域と関連があるといっても過言ではない。しかしながら，犯罪者や非行少年は，司法・犯罪領域を専門としている者以外からは，なにかと敬遠されやすいように思う。少年鑑別所で勤務していると，もう少し早い段階で的確な介入がなされていればと悔やまれるケースは少なくない。最近増えてきた非行少年のタイプとして，発達障害に対して周囲から適切な支援が得られず，学業についていけない，同輩集団から浮き上がるなどのネガティブな体験が続いた結果，いわゆる二次障害を呈し，非行に至るケースが散見される。また，日本全体の犯罪認知件数が確実に減少している中，刑務所の満期出所者の再入所率は依然として高い。これには出所しても住居や就労先の確保が難しいという社会的孤立の現実がある。公認心理師のカリキュラム内において，こうした犯罪者や非行少年の実態，その背景にある事情について触れる機会があれば，犯罪者や非行少年に対するまなざしが変わるのではないかと期待する。

あいだを埋める存在として



一般社団法人Psychoro（サイコロ）代表理事
谷口敏淳（たにぐち　としあつ）

Profile―谷口敏淳
鳥取生協病院の常勤心理士として約10年間医療現場に従事。2016年より福山大学人間文化学部心理学科准教授。2019年4月から一般社団法人Psychoroの代表理事として医療，教育，産業で臨床実践を行っている。

福祉分野は広範だ。公認心理師養成における大学及び大学院における実習候補施設として示されている施設数を見ると，福祉分野は他の分野より明らかに多いことからもそれがわかる。そして，示された施設には心理職との関わりが薄い施設もある。だからこそ，公認心理師としての今後の活動が期待できる分野であると感じている。

私は総合病院精神科での臨床実践が主なキャリアだ。そこで10年半勤めた後に大学教員として2年半勤め，現在は一般社団法人の代表理事として活動をしている。専門は認知行動療法（CBT）で，現在は病院と学校と企業で心理的支援やコンサルテーションを行っている。

医療現場を中心に15年ほどの臨床経験ではあるが，福祉職の方々とは臨床実践の中で密接に関わってきた。勤務していた医療機関では医療ソーシャルワーカーや精神保健福祉士（PSW）など福祉職の方々と一緒に働き，その専門性や価値観を学んだ。また地域との連携が必要なケースでは，地域の福祉職や企業の方々とカンファレンスを行ない，心理職として携わった。私の基礎となるこれらの臨床経験は，患者の健康と生活を支えていく上で，福祉的支援や地域連携の重要性を十分に教えてくれた。

やや前置きが長くなったが，他の分野で活動してきた立場として，福祉分野における公認心理師への期待を二点に絞って述べたい。まず「支援対象者に対する心理的介入や職場内コンサルテーションの提供」である。これは公認心理師の役割の中心であり当然ではあるが，福祉の現場において，支援対象者の心理状態の理解とそれに基づく対応を体系的に行える専門家が支援に携わることは，非常に大きいと感じる。ざっくりとした表現で語弊があるかもしれないが，福祉的支援の基本的な発想は，安全な対人関係の上で行う環境調整が中心になる。福祉職が行うソーシャルワークは多様な意味があるが，個人への支援で中心となるケースワークは制度を活用した援助と環境調整であろう。私の経験でも，先輩のベテランPSWもストレスマネジメント等の個人への積極的介入は，心理職の私に依頼してきていた。こうした福祉職の支援をCBTの観点で捉えると，福祉職によるケースワークは，応用行動分析の「A（Antecedent）」，認知療法の「A（Activating event）」であると言える。ただ，それでも対応が難しい場合に，私たちは心理職として個人の「B（BehaviorやBelief）」を理論に基づいて扱うことができる。これらは私たちにとっては基本的なことかもしれないが，福祉の現場では大きな強みである。もちろん，CBT以外の学派においても，内的な要因を考えることには変わりなく，同様であろう。

次に「分野間連携の潤滑油としての役割」である。福祉分野と他の4分野との位置づけを考えると，個人的には他の4分野間を埋めるように存在するイメージがある。例えば私が専門としている精神障害者の就労支援では，医療機関による治療的介入が一段落した段階で，職業リハビリテーションとして就労支援機関（福祉分野）が関わり，利用者の状況と意向を考慮しながら企業との調整を支援する。これは一例ではあるが，臨床において分野間の連携では，あらゆるケースに福祉機関が携わり，特に困難なケースほどその傾向は強くなると思われる。しかし，この分野間の連携の難しさの一つは，支援の一貫性が保ちにくくなることである。連携とは支援に携わる人が増えることであり，当然のようにその支援対象者の理解も多様となる。特に目に見えにくい心理的要因は，連携が広がるほど一貫性の担保が難しくなるため，心理職がまだまだ乏しい現状では，対象者の心理学的理解と支援方針の共有が分野間連携で特に難しくなるのは当然と言える。ただ，この福祉分野に公認心理師が携わることになると，支援対象者の心理学的理解とその支援を，分野間でより円滑に共有して行うことが可能となる。つまり，福祉分野での公認心理師の活動は，社会全体で心理的支援を行える連携の構築に大きく寄与できるものと言え，その意義は非常に大きいと考えられる。

私は医療を離れ地域で活動を始めた。福祉分野では家族支援や研究など，まだまだできることがある。現在地域にある心理的支援を繋ぎ，そして広げる存在として，福祉分野の公認心理師の活動に少しでも貢献する所存である。

父親の心理学

父親が育児に関わることが以前よりも当たり前になり，親子関係の研究においても父子関係を扱うものが増えてきました。父子関係の最新研究を様々な分野の先生方に紹介いただきます。より良き父親になるためには何を実践すればよいかを考えるきっかけになると幸いです。　（後藤和宏）

ワークライフバランスとは
── ライフステージと夫婦関係から探る

埼玉学園大学 特任教授
尾形和男（おがた　かずお）

Profile―尾形和男
1980年，東京学芸大学大学院教育学研究科修士課程修了。博士（教育学）。愛知教育大学名誉教授。2016年より現職。放送大学非常勤講師を兼任。専門は生涯発達心理学，教育心理学。著書は『父親の心理学』（編著，北大路書房）など。

「父親不在」という現象はイギリスの産業革命に端を発していますが，近年は産業革命当時とは異なる意味で用いられています。

我が国の場合，戦後経済復興のために男性が労働にあたり，世界でも労働時間の長い国として扱われてきています。同時に男女の役割分担意識も強く，そのために男性が家事・育児に関わる時間が少なく，女性が中心となって子育てに従事しているという構図が長く続いてきました。しかし，平成8年以降共働き家庭が専業主婦家庭よりも多くなり，それと並行して，合計特殊出生率の低下，平均寿命の伸び，女性の社会進出の進展，女性の生き方の変化，ジェンダー観の変化など種々の要因が絡み，男性の生き方も変化を余儀なくされているのです。

これは取りも直さず，男性の家事・育児と労働の両立をいかに捉え取り組むのかということに深く関連する問題です。男性の家事・育児は最近の社会状況の変化の中では今までにない踏み込んだ取り組みが求められているといえます。しかし，我が国の6歳未満児を有する男性の家事・育児参画が世界と比較してどのような現状にあるのか目を通して見ると（内閣府男女共同参画局，2017），欧米の先進国と比較して一番短い時間であることが指摘できます。しかし，年々父親の意識が変化し，家事・育児への参画が上昇していることも事実です。また，ファザーリング・ジャパン（FJ）といわれる若い父親の組織が全国にできてからは，目に見える形で父親の家事・育児参画が進んでいます。このような父親の家事・育児への関わりは視点を変えるとワークライフバランス（WLB）の問題そのものであることが指摘できるのです。

WLBは仕事，家庭，余暇時間，近隣への関わりの4領域がバランスよく保たれて，人々の生活が充実して精神的にも健康であり，人としての生きがいを感じている状況を指しています。言ってみれば自己実現ができている状況です。

しかし，WLBは4領域がどのようなバランスを保っているのがより望ましいのか，ということについては漠然としています。各家庭の仕事の状況が異なるなどの要因があるにしても，4領域のどの領域が重要なものになるのか，各領域の関連性，或いは相乗効果をもたらすのかなど，構造的に不透明な点が多いと思われます。一方，WLBの在り方はライフステージごとに異なると考えられます。例えば乳幼児期は仕事，子育てに費やす時間とエネルギー，夫婦間のコミュニケーションそして心身の疲労回復の調整が求められます。また，学童期以降は仕事に加え子どもの教育や将来のことについて夫婦による話し合い，子どもと向き合うことも求められます。

それでは，「家庭」「仕事」「余暇時間」「地域」それぞれの関わりは，ライフステージを通してどのような状況がより望ましいのでしょうか。

以上の視点に基づいて，より望ましいWLBの在り方を探索した調査結果の一部を簡潔に紹介します。愛知県，東京都，埼玉県，千葉県に在住の共働き家庭を調査対象としました。調査は協力関係機関などを通して実施しました。

4領域への関わりを父親と母親それぞれに回答してもらい，クラスタ分析（階層法）を実施し，四つの生活状況スタイル（「A：夫婦家庭中心型」〈夫婦共に家庭

へ関与が高い〉，「B：夫婦全関与型」〈夫婦共に地域活動を中心として全ての領域での関与が高い〉，「C：妻家庭関与中心型」〈妻の家庭関与が高く，それ以外の領域は低い〉，「D：夫婦家庭低関与型」〈夫婦ともに家庭関与をはじめとする全領域の関与が低い〉）に分類しました。そして，図1に示した四つの生活状況スタイルについて，特に夫婦関係の状況を比較検討しました。ここでは家族成員のストレス，家族機能も含めて多変量分散分析を行いました。

夫婦関係は質問紙を集計の上，因子分析（主因子法，プロマックス回転）を行い2因子抽出し，それぞれ「相手に対する満足感」「相手への要望」と命名し，各因子の因子得点を求めました。また，分析の結果は表1に示しました。

まず，「相手への満足感」については，妊婦家庭から大学生家庭に至るまで一貫してA,Bの両生活状況スタイルはDよりも有意に高いことが示されています。また，中学生家庭では夫の場合，Aが他の生活状況スタイルよりも有意に高いことも示されていて，夫婦共に家庭生活に軸を置いた生活の仕方に満足感が高いことも示されています。同様に妻の場合，夫と類似した結果が得られているのです。また，全体としてAとBの生活状況は夫婦関係が良好であることも併せて読み取れます。一方，「相手への要望」では夫の場合は中学生家庭でCよりもAとBが高く，妻の場合は児童家庭，中学生家庭，高校生家庭でDよりもAとBが基本的に高いことが示されています。

以上の結果から，夫婦間の満足感は各ライフステージにおいて家庭を中心に，仕事，余暇時間，あるいは地域への関わりがある場合に高いことが示されました。家庭生活に軸を置く場合は，子育てや進学のこと，そして家族成員相互のことなど家族全体の理解が深まり，健全な家族機能が形成されることが推測されます。

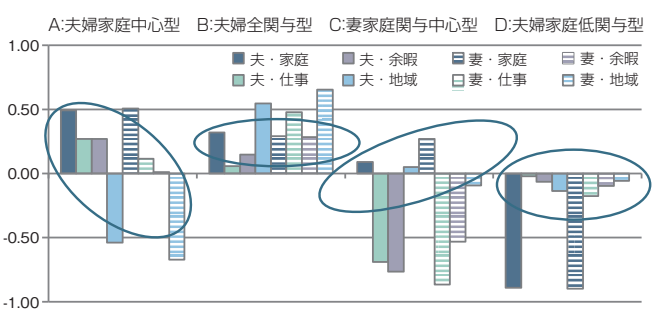


図1　共働き家庭の生活状況

表1　共働き家庭の生活状況とライフステージに基づく夫婦関係

			妊婦家庭（119 家庭）	乳幼児家庭（137 家庭）	児童家庭（214 家庭）	中学生家庭（363 家庭）	高校生家庭（184 家庭）	大学生家庭（195 家庭）
夫婦関係	夫	満足感	A,B>D** C>D*	A,B>D** C>D*	A,B>D**	A,B>D** C>D* A>C** A>B*	A,B,C>D**	A,B>D**
		相手への要望			A,B>C*			
	妻	満足感	A,B>D** C>D*	A,B>D*	A,B>D** B>C*	A,B>D** A>C**	A,B,C>D**	A,B,C>D**
		相手への要望		B>D*	A>D**	A,B>D*		

* p< .05　　** p< .01

相手に対する要望については，自分の話を聞いてほしい，自分の考えを受け入れてほしい，家庭や家族への関心をもっと持ってほしい，など自分や家族との関係を維持したいという内容であり，児童家庭から大学生家庭で妻に多く見られています。これは子どもの勉強，進学，将来のことなど夫婦で相談していかなければならない時期にあり，このような内容を含んだ要望とも受け取れます。また，中学生家庭以降に夫婦相互の要望も見られますが，このことは子どもがある程度手を離れ，夫婦の在り方を見直し再成長に向けて模索し始めている状況とも考えられます。

一方，Dの生活状況スタイルについては4領域全てに渡り低く，具体的な家庭像をイメージしにくくなっています。これに関して，児童家庭から高校生家庭にかけて，妻の夫に対する要望がDはA，Bよりも低く，夫婦それぞれがお互いに了承の上，自分のペースで生活しているようにも考えられます。また，今回生活状況スタイル別に職業の内訳を分類していないのでWLBとの関連性は明確ではありません。しかし最近は職業形態も多様化し，フリーランスやテレワークなど労働時間や働き場所など比較的自由な職業形態が出現しており，このような働き方も含まれているとも考えられます。そこには，今回測定したもの以外の充実した生き方が存在することも考えられるのです。

文　献

内閣府男女共同参画局（2017）平成28年社会生活基本調査の結果から：男性の育児・家事関連時間
尾形和男（2018）『家庭と仕事の心理学：子どもの育ちとワーク・ライフ・バランス』風間書房

乳幼児期の子育てと父親

── 父親研究を通して考える

文京学院大学人間学部 准教授
森下葉子（もりした　ようこ）

Profile―森下葉子
2008年，東京学芸大学大学院連合教育学研究科修了。博士（教育学）。2017年より現職。専門は保育学，幼児教育学，発達心理学。著書は『父親の心理学』（分担執筆，北大路書房），『家庭と仕事の心理学』（分担執筆，風間書房）など。

筆者が父親による育児を卒業論文で扱ってから20年近く経ちました。その間，女性の社会進出や核家族化等の社会の変化を受けて，父親も積極的に育児に関わることが求められるようになりました。2000年代には，そうした父親を表す「イクメン」という言葉が浸透し，男性の育児休業取得率の目標値が掲げられ，自治体や企業でも男性の育児関与を促進するための取組みが求められるようになりました。朝，スーツ姿に抱っこ紐で子どもを抱き，両手に大きな荷物を抱えて乗車する男性。夕暮れ時のスーパーで保育園帰りの子どもの手を引きながら，お惣菜を選んでいる男性。休日の公園で子どもと一緒にダンゴムシを探す男性。そうした男性の姿を日常でもごく自然に見られるようになりました。

乳幼児の育ちと父親

そうした社会の変化のなか，母子研究が中心だった発達心理学や家族社会学，家族心理学等さまざまな分野において，欧米から20年ほど遅れて1980年代後半から徐々に父親に関する研究が蓄積されるようになりました。その多くは乳幼児を育てる家庭を対象にしたものです。

子どもが誕生し，第1子が就学するまでの家庭では，夫婦それぞれが親役割を受容すること，家庭内のルールを構築したり見直したりすること，子どもを中心とした生活への適応などが課題となります。時間やエネルギーの大半が子どもに注がれるようになり，仕事と家庭のバランスの再調整，夫婦間での役割分担が求められます。

この時期の養育者との関わりや愛着形成が子どもの発達にとって重要であることは言うまでもありません。父親の育児関与に関する研究でも，乳幼児期に父親が積極的に遊びや世話をすることが子どもの社会性の発達や社会生活能力を促すことが示されています（例えば，加藤・石井・牧野・土谷，2002；尾形，1995）。

主たる養育者である母親が育児ストレスや不安，孤独感を感じやすい時期でもあります。夫が妻の話を聴いたり，育児にまつわる様々な感情を共有したり，子どもについて共に考えたりすることが妻の育児ストレスや不安の軽減につながり，安定した母子関係が形成・維持され，子どもの発達に間接的に影響することが明らかにされています。子どもへの直接的な関わりだけでなく，母親への心理的サポートも父親の重要な役割とされています。

このような乳幼児期の父親の直接的・間接的な関わりは，児童期以降の子どもの学校への適応や対人関係，学業成績に影響することも明らかにされています。

諸研究における父親の育児関与

①育児はどこまで？

父親による育児の重要性を示したこれまでの研究では，「子どもと遊ぶ」「食事をする」「幼稚園（保育所）の送迎」「入浴する」「着替えを手伝う」等の育児行為の実行頻度や「妻と子どものことを話す」「妻と子育ての方針について話し合う」等の妻と話し合う頻度などから父親の育児を捉えられてきました。しかし，本当にこれで「育児」を捉えきれるのでしょうか。例えば子どもと食事をするには，献立を考え，食材を揃え，調理し，食卓に料理を並べ，食後は後片付けをする……等，「子どもと食事する」の前後には細かな行為が付随します。同じ頻度であっても，妻が前後の支度を整えている場合と自分で全てを担う場合とでは関与度合いは異なるでしょう。ラムら（1987）は，父親の育児関与には「interaction（相互交流）」「availability（有効性）」「responsibility（責任）」の３つの要素があると述べています（Lamb, Pleck, Charnov, & Levine, 1987）。遊びや世話のほかに，子どもが望んだ時に関われるような姿勢でいること，稼得や将来の保障も父親の育児と捉えるのです。また，父親の育児関与尺度（inventory of Father

Involvement: IFI）を作成した研究では，①しつけたり物事を教えたりする責任，②学校でのことを励ます，③配偶者へのサポート，④経済的保障，⑤子どもと共に過ごす時間の確保，⑥子どもに愛情を伝える，⑦子どもの才能を育てたり将来を考えたりする，⑧読書や宿題のサポート，⑨子どもの生活への関心の9つの視点から父親の育児関与を捉えています（Hawkins, Bradford, Palkovitz, Christiansen, Day, & Call, 2002）。日本の研究でも，父親の育児や家庭への関わりを「協同育児」や「家族する」という視点から捉えている研究もあります。青木（2009）は，夫婦間で育児を連携・調整し，育児行動の分担の衡平さを示す「協同育児」という概念を用いて，共働き家庭の夫婦間の育児の分担について検討しています。「協同育児」には，夫婦間の話し合いを中心とした「相互理解・調整」，子どもの遊びに関する分担を示す「遊び相手の分担の衡平さ」，着替えや保育所への送迎の分担を示す「世話分担の衡平さ」という3因子が含まれています。また，大野（2016）は，家族への関わりや関心などを示す8項目で構成された「家族する」尺度を作成しています（表1）。家族に関心を持ち，一員として主体的に関わる態度を捉えようとしています。

②量なのか質なのか

また，食事中に黙々と無言で食べているのか，「美味しいね」など声をかけているのか，「こぼさないように！」と注意が多いのか等，どのように子どもに働きかけているのか，子どもからの働きかけにどのように応答しているのかまでは「頻度」だけでは捉えられません。子どもに対する父親の援助的関わりが子どもの認知，言語，社会情動面の発達に寄与する等，父親の養育態度に関する研究からは育児の頻度のみならずその質も重要であることがわかります。父親の養育態度に関する研究は母親に比べても少なく十分とは言えません。今後，研究が積み重ねられていくことを期待しています。

おわりに

父親の育児関与についての研究は「育児とは何か」を改めて考える機会を与えてくれたと思っています。育児は実に奥深く，子どものことを考えたり，衣類を買い揃えたり，オムツの残数を管理したり，学校のスケジュールの把握や調整も育児の一部です。世話や遊びにとどまらない管理や調整，生活の保障等の「見えにくい育児」をどこまで拾いあげるのか，それらをどのような尺度で測定するのか等，議論の余地は十分ありそうです。

また，共働き家庭の増加に伴い，0歳代から保育所に通う子どもも増えています。家事の代行サービスやベビーシッターを利用する家庭もあります。子どもたちが育つ場が家庭内外で多様化する今，改めて家庭における父親や母親の役割，在り方について考えていかなければならないと考えています。

表1 「家族する」尺度（大野，2016）

1. 家族が自分にどうしてほしいかを考えて行動する
2. 家族の好みを把握している
3. 家の中で何がどこにしまわれているか，よく知らない（逆転項目）
4. その日の家族の予定はだいたい把握している
5. 自分が困った時は家族の誰かに助けを求める
6. 家族の今の状況や気持ちについて，自分から積極的に尋ねて知ろうとする
7. 自分の今の状況や気持ちについて，積極的に家族に伝える
8. 毎日がマンネリにならないよう，工夫や努力をする

文　献

青木聡子（2009）幼児をもつ共働き夫婦の育児における協同とそれに関わる要因：育児の計画における連携・調整と育児行動の分担に着目して. 発達心理学研究, *20*, 382-392.

Hawkins, A. J., Bradford, K. P., Palkovitz, R., Christiansen, S. L., Day, ar. Ad., & Call, V. R. A.（2002）The inventory of father involvement: A pilot study of a new measure of father involvement. *The Journal of Men's Studies, 10*, 183-196.

加藤邦子・石井クンツ昌子・牧野カツコ・土谷みち子（2002）父親の育児かかわり及び母親の育児不安が3歳児の社会性に及ぼす影響：社会的背景の異なる2つのコホート比較から. 発達心理学研究, *13*, 30-41.

Lamb, M. E., Pleck, J. B., Charnov, E. L., & Levine, L. A.（1987）A biosocial perspective on paternal behavior and involvement. In Lancaster, J. B.（Ed.）*Parenting across the life span: Biosocial dimensions*. Aldine Publishing. pp.111-142.

尾形和男（1995）父親の育児と幼児の社会生活能力：共働き家庭と専業主婦家庭の比較. 教育心理学研究, *43*, 335-342.

尾形和男（編著）（2011）『父親の心理学』北大路書房

大野祥子（2016）『「家族する」男性たち：おとなの発達とジェンダー規範からの脱却』東京大学出版会

時に手を抜くイクメン，マーモセットのパパ

上智大学総合人間科学部心理学科 准教授
齋藤慈子（さいとう　あつこ）

Profile―齋藤慈子
2005年，東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了。博士（学術）。2018年から現職。理化学研究所脳神経科学研究センター客員研究員。専門は発達心理学，比較認知科学，進化心理学。著書は『ベーシック発達心理学』（編著，東京大学出版会）など。

ご存知のとおり，私たちヒトは哺乳類であり，その中の霊長類に分類されます。哺乳類は，その名のとおり，母親が赤ん坊に母乳を与えて育てる動物です。子育てをしない動物もいる中，世話が必須なので，子育てにエネルギーを投資する動物といえます（ただし哺乳類の約9割の種では，父親は子育てをしません）。霊長類は，その中でもさらに子どもを少なく産み，大切に育てる仲間だといえます。霊長類は群れ生活も特徴の一つですが，群れを形成する種では，父親は子どもを含む群れを外敵（同種のオスや捕食者）から守る，という役割が共通して見られます。

しかし，同じ霊長類だからといって，当然ながらみな同じような子育て，父親と子のかかわりが見られるわけではありません。ヒトに最も近い仲間である大型類人猿でも（図1），社会のあり方と父親の子育てはとても多様です。例えばチンパンジーの群れは複雄複雌群で，メスは複数のオスと交尾をする乱婚型のため，子どもの父親が誰かはわかりません。そうなると，オスも子どもと遊ぶことはあるようですが，特定の子どもに対する積極的な世話は進化しにくいでしょう。ゴリラは，一夫多妻で，群れの中の子どもはみなその群れのトップのオスの子になります。ゴリラの母親がわが子を一番に守る中，父親は群れ内の弱い立場の子の味方をするそうです。またオランウータンは単独性なので，オスは全く子どもに関与しません（これらの霊長類を含む動物の子育てに関して，詳しくは，齋藤・平石・久世〔近刊〕をご覧ください）。

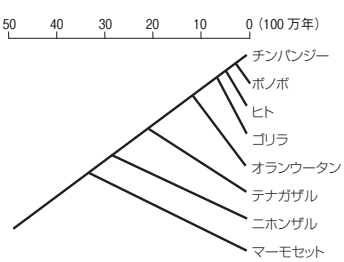


図1　マーモセットとヒトの系統発生的関係（年代は目安）。テナガザルより上は類人猿，オランウータンより上は大型類人猿（ヒト科）

マーモセットとヒトの関係

今回取り上げるのは，コモンマーモセット（*Callithrix jacchus*）という霊長類です（図2）。体重300～400gの小さなサルです。原産地はブラジルですが，そのサイズや霊長類にしては多産な特徴から，近年では医学・神経科学の分野で実験動物として注目を集め，日本でも多くの研究所・研究室で飼育されています。

マーモセットの仲間は，霊長類とはいえヒトから系統発生的にはずいぶん離れています（図1）。しかし，ヒトとマーモセットの間には，共通する特徴がいくつも見られます。社会的フィードバックを受ける複雑な音声コミュニケーションを発達させていたり，模倣をしたりします。多様性はありながらも一夫一妻の繁殖形態を示し，オスメスの間に柔軟な絆を形成します。さらにチンパンジーでは見られないような，自ら他者を助けるような行動も見られます。

何といっても特徴的なのが，この特集のテーマである養育行動です。先述のように，マーモセットは多産です。年に2回，双子を出産します。メスは出産後約1週間で発情・排卵し，うまくいけば妊娠して，双子に授乳をしながらお腹の中で次の子を育てるという大変なことをします。新生児は1頭30g前後で，2頭合わせると母親の体重のおよそ20パーセントにもなります。離乳する頃には乳児2頭でオトナの体重の100パーセントにもなります。背負って運ぶだけでも大変なことは想像に難くありません。その負担を軽減する

図2　双子を背負うマーモセットの父親

かのように，父親も上のきょうだい個体も積極的に子育てを行います。まさにメス単独での子育てが大変なために，共同繁殖（母親以外の個体が子育てに参加する繁殖様式）を行う，ヒトと共通する特徴といえます。また，ヒトでよく見られる，母親や養育者が母乳・ミルク以外の食べ物を子どもに与えるという行為は，霊長類含め哺乳類では稀な行動なのですが，マーモセットの仲間では，母親だけでなく，父親もきょうだい個体も，離乳期の乳児に食物を分け与えることが知られています。このように，マーモセットは，ヒトと共通する稀な養育行動の特徴を持っているため，系統発生的な距離は遠いけれども，養育行動とその背景にあるメカニズム解明のモデルとして，貴重な動物といえるでしょう（Saito, 2015）。

マーモセットのイクメンぶり

母親単独での子育てが大変なマーモセットでは，父親の役割は大きなものといえます。そのためでしょうか，マーモセットのオスでは，父親としての生理的な準備や変化が見られます。メスの妊娠期間中，オスはメスの体重増加に合わせて自身も体重を増やすだけでなく，性ホルモンの値も変化させます。さらに，父親になると，前頭前野でのシナプス形成や，神経伝達物質の受容体の数が変化します。こういった生理的な準備・変化のおかげか，生後すぐから，もっというと出産の場面から，マーモセットのオスは父親的役割を果たします。オスはメスの出産に際し，助産師的な働きをし，生後すぐから子どもを背負う行動が見られるのです。さらに父親の乳児への敏感性は，わが子に限定されません。母親同様，子ザルの鳴き声には自他の子の区別なく近寄って抱き取ろうとするようです。先の食物分配行動といい，マーモセットの父親は超イクメンザルといえるでしょう。

マーモセットの父親は完璧かというとそうでもなく，手を抜くこともあります。先述のように，マーモセットのメスは，出産後1週間程度で発情・排卵をしますが，その前後，父親の背負い行動は減ります。父親は何をしているかというと，発情したメスを追いかけているようなのです。また，兄姉個体が成長後も群れにとどまる習性のあるマーモセットでは，子育てを手伝うヘルパーの数が群れ内に多くなることもあります。そんな時，授乳しなければならない母親に比べると，父親の背負い行動は，ヘルパーの数に依存して減るといわれています。また，乳児がいることで夜中の覚醒回数が母親は増えるけれども，父親は増えないという報告もあります。ヒト同様（個人差，家庭差が大きそうですが），夜中の乳児の相手はお母さんがすることが多いのかもしれません。

おわりに

マーモセットの父親全般の子育てを紹介してきましたが，マーモセットは遺伝的に均質な近交系ではありませんので，養育行動を含めた行動には大きな個体差があります。父親でも母親でも，おそらくその時の体調や状況，生育環境，経験，遺伝的要因などによって，乳児への反応性，世話行動には違いが見られます。こういった養育行動の違いが，子どもの発達にどのように影響を与えるのかは，発達研究において非常に重要なトピックです。行動遺伝学などを除くと，一般的なヒトを対象とした発達研究では，環境要因と遺伝的要因を切り分けることは容易ではありません。マーモセット等の霊長類を対象とした研究では，倫理的配慮がもちろん必要ですし，安易に結果をヒトに外挿することは避けなければなりませんが，里子実験などにより環境要因と遺伝的要因を切り分けることができるため，上記の重要なトピックに大きな貢献をしてくれるのではないかと思います。実際マーモセット等霊長類を対象として，早期社会的環境が，その後の認知的発達やストレス反応にどのような影響を与えるのかを調べた研究が蓄積しつつあります（French & Carp, 2016）。

子育ては人間の歴史の中で変遷するものであり，文化による多様性も大きく，様々な育児指南がなされる中，本当に大切なものは何なのか，逆に大切でないものは何なのかを明らかにすることは，育児をするお父さんお母さんにとって必要なことだと思います。ヒトの子どもを育てるのは，言うまでもなく大変なことなので，これらの情報をもとに，マーモセットの父親のように，手を抜けるところでは抜くのがよいのではと思います。マーモセットの養育行動の研究から，私たちヒトの子育てのヒントが得られることを期待しています。

文　献

French, J. A. & Carp, S. B.（2016）Early-life social adversity and developmental processes in nonhuman primates. *Curr Opin Behav Sci, 7*, 40-46.

Saito, A.（2015）The marmoset as a model for the study of primate parental behavior. *Neurosci Res, 93*, 99-109.

齋藤慈子・平石界・久世濃子（編）『正解は一つじゃない：子育てする動物たち』東京大学出版会（近刊）

オスの養育行動発現に関する神経・生理学

北海道大学大学院薬学研究院 講師
天野大樹（あまの　たいじゅ）

Profile―天野大樹
2007年，九州大学大学院薬学研究院修了。博士（薬学）。国立精神神経センター外来研究員，ニュージャージー州立ラトガース大学博士研究員，理化学研究所特別研究員などを経て，2015年より現職。専門は神経薬理学。

はじめに

幼若な哺乳類動物が生き残るためには，親からの哺乳や食物の供与のみならず，保温，排便・排尿の補助といったサポートが必要である。さらに不適切養育を受けると，成長後に不安障害をはじめとする精神疾患の罹患率が上昇することが報告されている（Heim & Nemeroff, 2001）。幼若期に付加される母子分離ストレスは精神疾患モデルを作成するための手法の一つとして実験室レベルで用いられている（Minami, 2017）。不適切養育によって起こる問題を回避するためには，親側の養育する意欲を向上させることが解決策となるが，その脳内メカニズムは不明な点が多いのが現状である。また子供に対する不適切養育，つまり育児放棄や暴力的虐待がどのようにして起こるのかについても考慮に入れる必要がある。本稿ではオスの養育行動に関わる知見を紹介させていただく。

行動様式の変遷

性成熟以前の幼少動物は，新生児・幼若動物に対して親が示すような巣への連れ戻しや保温などの養育行動を示す。しかし周囲に新生児・幼若動物が存在しない環境下で性成熟期を迎えると，オスは性成熟後に出会った新生児・幼若動物に対して喰殺と呼ばれる攻撃行動を示す（Amano, 2017）。喰殺は自身の子供がより多くのリソースを獲得できるように，また子育て中のメスがより早く生殖可能な状態にすることで，自身の遺伝子を持つ子供の繁殖効率を上昇させるための行為と考えられている（Hrdy, 1974）。哺乳類に限るとマウスをはじめとするげっ歯類動物やライオン，チンパンジーなどで喰殺の発生が報告されている。興味深いことにオスによる喰殺の発生頻度はメスとの交尾をきっかけとして次第に減少していく。メスとの同居を継続して出産を迎えた後では，喰殺はほとんど見られなくなり，巣への連れ戻しや保温などの養育行動を示すオスも現れる（Tachikawa, 2013; vom Saal, 1982）。また子供に繰り返し提示することで，通常であれば子育て行動を示さない交尾未経験のオスであっても養育行動を示す。この効果は性成熟前の若い段階のほうがより強く現れる（Mayer et al, 1979）。オスは授乳することができないため，父親のみの養育によって必ずしも新生児の生存を保証することはできない。しかし，母親の不在を定期的に設けた場合には，父親からの養育によって子供の成育を正常範囲内に留めることができることから，補完的な役割を果たしていると言える（Dudley, 1974）。

子に対する社会行動を司る神経回路

養育行動に寄与する最も重要な脳部位は内側視索前野である。この領域の破壊によって養育行動は阻害される。マウスの場合にはそれまで養育行動を示していた母親・父親マウスであっても内側視索前野の破壊によって養育行動の消失にとどまらず喰殺が見られるようになる（Tsuneoka, 2015）。内側視索前野は中脳に存在する中心灰白質や腹側被蓋野（報酬や意欲に関わるドーパミン神経細胞を多く含む領域）に投射して養育行動を促進していると考えられており，近年では光遺伝学的手法を用いた実験結果も報告されている（Kohl, 2018; Fang, 2018;　図1参照）。一方で内側視索前野への入力元のうちいずれが養育行動を促

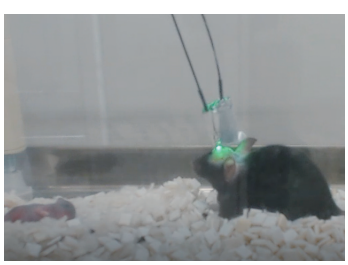


図1　光遺伝学的手法を用いた行動実験の様子。外科的手術によって光感受性イオンチャネルを脳内に発現させるとともに光ファイバーを挿入し，レーザー光の on-off により特定の脳領域の機能を操作する。この状態で仔マウス（左）に対する行動様式を観察する。

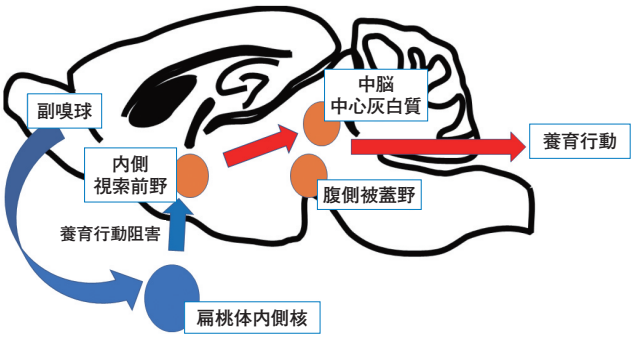


図２　養育に関連する脳部位（マウス）。内側視索前野は中脳中心灰白質や腹側被蓋野に投射することで養育行動を促進すると考えられる（赤矢印）。一方で，副嗅球系からの感覚情報は扁桃体内側核を経由して内側視索前野を阻害する機能があると予想されている（青矢印）。現在までに内側視索前野に入力して養育行動を促進する入力元は明らかとなっていない。

進させる機能を持つのか，明らかになっていない。

またオスマウスの喰殺は副嗅球系や分界条床核の破壊などによって抑制される。興味深いことにフェロモンを受容することが知られる副嗅球系の鋤鼻器は父親マウスでは交尾未経験マウスに比べ子マウスに対する反応性が低下している。さらに鋤鼻器を破壊することでオスマウスの養育行動が促進される（Tachikawa, 2013; Wu, 2014）。副嗅球系を起点とする感覚情報は主に扁桃体内側核へと入力しており，扁桃体内側核から内側視索前野への投射も認められる。実はこれまでこの神経回路は性行動に重要な役割を果たしていると考えられてきた。性経験を経て何らかの変化が副嗅球系—扁桃体内側核—内側視索前野の間で起こり，交尾未経験マウスの喰殺行動から父親マウスの養育行動への行動変化を引き起こしている可能性がある（図2）。ただ，副嗅球系が行動に与える影響の大きさは動物種によって異なる。また一部の霊長類では副嗅球系が存在しない。子供から受ける感覚情報がどのように内側視索前野に伝わるか議論する上で動物種には特に注意を払う必要がある。

まとめ

養育行動はそれ自体が様々な行動様式を含むとともに，社会経験の各段階や外部環境，性ホルモンやオキシトシン，プロラクチン等のホルモンなど様々な影響を受けている。メスとの交尾や同居などの経験と，子供との触れ合い経験によって脳内を変化させ，オスは新たな社会環境に適応していると考えられる。それぞれの社会経験によって起こる神経変化のメカニズムやホルモンの作用を明らかにしていくことで，養育を促進し，虐待や不適切養育を防止する手段の開発の基礎となる生物学的基盤の構築が求められていると言えよう。

文　献

Amano, T. et al.（2017）Development-dependent behavioral change toward pups and synaptic transmission in the rhomboid nucleus of the bed nucleus of the stria terminalis. *Behav Brain Res., 325*(Pt B), 131-137.

Dudley, D.（1974）Contributions of paternal care to the growth and development of the young in Peromyscus californicus. *Behavioral Biology, 11*, 155-166.

Fang, Y. Y. et al.（2018）A hypothalamic midbrain pathway essential for driving maternal behaviors. *Neuron, 98*, 192-207.

Heim, C. & Nemeroff, C. B.（2001）The role of childhood trauma in the neurobiology of mood and anxiety disorders: Preclinical and clinical studies. *Biol Psychiatry, 49*, 1023-39.

Hrdy, S. B.（1974）Male-Male competition and infanticide among langurs（Presbytis-Entellus）of abu, rajasthan. *Folia Primatol 22*, 19-58.

Kohl, J. et al.（2018）Functional circuit architecture underlying parental behaviour. *Nature, 556*, 326-331.

Mayer, A. D. et al.（1979）Ontogeny of maternal behavior in the laboratory rat: Factors underlying changes in responsiveness from 30 to 90 days. *Dev. Psychobiol, 12*, 425-439.

Minami, S. et al.（2017）Suppression of reward-induced dopamine release in the nucleus accumbens in animal models of depression: Differential responses to drug treatment. *Neurosci Lett, 22*, 72-76.

Tachikawa, K. S. et al.（2013）Behavioral transition from attack to parenting in male mice: A crucial role of the vomeronasal system. *J Neurosci, 33*, 5120-5126.

Tsuneoka, Y. et al.（2015）Distinct preoptic-BST nuclei dissociate paternal and infanticidal behavior in mice. *EMBO J., 34*, 2652-70.

vom Saal, F. S. & Howard, L. S.（1982）The regulation of infanticide and parental behavior: Implications for reproductive success in male mice. *Science, 215*, 1270-1272.

Wu, Z. et al.（2014）Galanin neurons in the medial preoptic area govern parental behaviour. *Nature, 509*, 325-330.

心理学史 諸国探訪
［第４回］

タイ

サトウタツヤ
立命館大学総合心理学部教授。Chumsai教授の写真が見つからないので，タイ語の氏名表記で検索。当然ながらタイ語で書かれていて全く分からなかったが，グーグル翻訳をかけたら，日本語に翻訳されたタイ語のページの情報が，Chumsai教授の情報に一致していることが分かったので，無事，写真をゲット！　ありがたいことです。

東南アジアに位置しているタイランド。立憲君主制をとり，首都はバンコク。人口は6,700万人で，タイ族が人口の90パーセントを占め，また，同じく90パーセントほどが仏教に帰依している。タイは「国王を元首とする民主主義」体制をとっていて，最近（2019年5月）ワチラロンコン国王（66）の戴冠式が3日間にわたり行われていたことも記憶に新しい。年の数え方は仏滅紀元を採用しており，釈迦が入滅した翌年（紀元前543年）を仏滅紀元元年としている（タイ・カンボジア・ラオス）。具体的には，西暦2019年＝令和元年＝仏暦2562年となる。少しややこしいことに，ミャンマーやスリランカは仏滅の年を仏暦1年としており，近隣で年の数え方が1年ずれている。面倒じゃないか？　と気をもむのは余計なお世話であろう。日本では最近，元号は面倒なので西暦にという意見もあったように記憶しているが，西洋の紀年法の精神的植民地化になっていないかどうか，視野を広く持つべきであろう。

インドや日本と同じく，仏教の教えの中に精神の探究に関するものがあり，千年以上そうした活動は行われているものの，学問体系としての心理学が始まったのは，これまたインドや日本と同じく西洋の近代心理学の影響を受けてからのこととなる。

タイで心理学が最初に紹介されたのは教師養成の分野である。1930年，Nakorn Pathomの教員養成校や，Chulalongkorn大学の教育学部に心理学のコースが設けられた。

1944年には初めての心理学のテキストがChumsaiによって刊行された。彼はアメリカ・ミシガン大学で博士号を得た人物である。1961年，タイで初めての心理学会（タイ心理学会）が設立された時には初代会長に就任した。

M. L. Tui Chumsai（1909-1996）

さて，タイは有数の親日国であり第二次世界大戦においても友好国であったが，戦争終結前に親英米派（抗日派）が政権を握って戦勝国となった。1946年にはユネスコの支援の元，バンコクに児童心理学の研究機関が設立された。この機関の名称は「国際・児童心理学研究機構」であったが，1975年には行動科学研究機構と改称され，発達心理学，教育心理学，社会心理学，そして実験心理学の総合的研究センターとなった。

さて，本格的に臨床心理学に関連する心理学の学士号を与えるカリキュラムを作ったのはタイ北部のChiang Mai（チェンマイ）大学であり，1965年のことであった。この大学における心理学プログラムの創設に尽力したのが前述のChumsaiである。

この時のカリキュラムには，地方の精神病院における実習や首都バンコクの精神病院におけるインターンシップも組み込まれていたが，心理学専攻者の職務は心理検査および非常に限定的な心理療法に制限されていた。使用された検査はWAISやWISC，ベンダー・ゲシュタルト検査などであった。タイにおいて臨床心理学者の協会が設置されたのは1969年である。臨床心理学の修士課程が設置されたのは1979年（バンコクのMahidol大学）であり，最初の博士課程が設置されたのはChulalongkorn大学であり，カウンセリング心理学，社会心理学，そして発達心理学の領域であった（2001）。

CMU Chiang Mai University
チェンマイ大学のロゴ

タイにおいてPsychologistという名称は，心理学を研究する人（心理学者）という意味のほか，臨床心理学の実践者（心理士）という意味をもつが，それもアメリカなどと同じである。近年では，2004年のスマトラ沖地震後の大津波の被害者への対応，HIV（ヒト免疫不全ウィルス）感染者へのケア，などにおいて，医療関係者と協働する機会が多く，その評価も高まっているという。

文　献

Baker, D. B.（Ed.）（2012）*The Oxford handbook of the history of psychology: Global perspectives.* Oxford University Press. pp.672.

移り行く時代の中での心理学教育

関西福祉科学大学心理科学部 准教授
津田恭充（つだ　ひさみつ）

高校生のための心理学講座

平成最後の「高校生のための心理学講座」が関西福祉科学大学で開催されました。今後の開催校の参考になればと思い，その様子を記させていただきます。

開催日は2019年3月24日（日），50分の講座の5本立てという構成でした。申し込み者は予約段階では60名強でしたが，キャンセルもあり実際の参加者は約50名でした。日本心理学会や大学のホームページでの周知，近隣の高校や研究会等への宣伝を行った結果，高校生だけでなく，多くの一般の方にもお越しいただきました。参加者の属性は高校生1に対して一般参加者2，年齢層は10代と40代が最も多く，その多くは親子連れだったと思われます。男女比は男性1に対して女性2でした。参加者は近隣の方のみだろうと踏んでいたのですが，関東からの参加者もおられました。また，日本心理学会の会員や認定心理士の方も10名ほどおられました。高校生以外も参加可能な形にすると，参加者によって予備知識にかなり差が生じるので，その点を考慮した授業にする必要があると思います。基本的に5時間連続の受講を前提として募集をかけましたが，これだけの長丁場となりますと参加するのに少々勇気が必要かもしれません。途中退席・途中参加を認める形でも良かったかもしれないと思います。

さて，午前の講座は臨床心理学（近畿大学・本岡寛子先生）と産業心理学（神戸学院大学・中川裕美先生）でした。本岡先生からは不安や落ち込みに対処するための問題解決療法について，中川先生からは職場メンタルヘルスに役立つ感情マネジメントについて，体験的なワークやフロアとの質疑応答も交えながらお話ししていただきました。午後は本学の教員が，社会心理学（竹橋洋毅先生），健康心理学（福田早苗先生），認知心理学（津田恭充）を担当しました。竹橋先生からは，説得（対人）・目標達成（個人），リーダーシップ（集団）について，福田先生からはストレス測定やストレス対処について，津田からは認知バイアスや知覚的錯覚について，それぞれ実際にストレスを測定したり錯覚を体験したりしながら，そのメカニズムや日常生活への応用について解説しました。

講師の先生方にそれぞれ体験的な内容や双方向的なやり取りを盛り込んでいただいたこともあり，感想には多くの好評の声をいただきました。主なものとしては，「心理学がどのようなことを研究する学問なのかが理解できた」「実践的な内容（マインドフルネスや問題解決療法など）が聞けて良かった」「いろいろな人の意見が聞けて楽しかった」といったものがあります。高校生と大人とでは講座に期待することが異なるはずですが，一定程度は双方の期待に応えることができたのではないでしょうか。

ところで，私が出前授業や市民講座等でお話しするときにも，上述した感想にあるような「今日から使える！」とか「不思議な現象を体験！」といった内容が求められたり，実際にそれがウケる傾向にあります。最近はクラウドアプリも充実してきているので，スマートフォンひとつで簡単な調査や実験はできますし，その結果をリアルタイムで共有し，コメントをつけることも可能です。これにより，受講生と教員のコミュニケーションだけでなく，受講生同士

Profile―津田恭充
名古屋大学大学院環境学研究科博士課程後期課程修了。博士（心理学）。名古屋大学大学院環境学研究科博士研究員，愛知学泉大学家政学部を経て現職。専門は臨床心理学，社会心理学。著訳書は『ポジティブ精神医学』（共訳，金剛出版），『ポジティブ心理学を味わう：エンゲイジメントを高める25のアクティビティ』（共訳，北大路書房），『読んでわかる教育心理学（ライブラリ読んでわかる心理学5）』（共著，サイエンス社）など。

のコミュニケーションも促されます。これに関しては，「ウェブ上で発言したところで，実社会で役立つコミュニケーション能力が上がるとは思えない」という意見もあるかもしれませんが，考えたり，その考えをまとめて表現したりする機会を増やすという意味では無駄な取り組みではないと思っています。ICTは今後もさらに進歩し，授業のあり方もそれに合わせて多様性を増していくことは間違いありませんが，ここで大事なのは，単に技術を伝授したり面白い現象を体験してワイワイ盛り上がって終えるのではなく，なぜそれに効果があるのかとか，なぜそのような現象が生じるのかという「なぜ」に迫る（あるいは，受講者自身の手で「なぜ」を追求したくなるように仕向ける）ことだと思っています。それが，心理的現象のメカニズムを解き明かす楽しさと難しさ，ひいては学問としての心理学に近づくための第一歩であると考えているからです。高校までは心理学という科目はないため，必ずしもこれは容易なことではありませんが，それだけに心理学教員としてのやりがいを感じるところでもあります。

公認心理師養成と心理学教育

2018年度の日本の心理学教育における最大の出来事のひとつは，多くの大学で公認心理師養成が始まったことではないでしょうか。本学でも，学部・大学院で公認心理師養成に取り組んでいます。大学名のとおり福祉を中心とする大学であるため，以前から心理職や福祉職といった対人援助職は学生にとって主な就職希望先のひとつでしたが，公認心理師が誕生したことで，入学前あるいは入学後のかなり早い段階から心理職を希望する学生が増加しています。

その一方で，「よくわからないけれども，公認心理師は国家資格だから，取得すればきっと明るい未来が待っている」「よくわからないけれども，取れる資格は取っておこう」という考えが一部の受験生や学生にはあるように見受けられます。臨床心理士養成は大学院が行うため，学部時代に自分の適性や将来像について考えたうえで進学するという余裕がありましたが，公認心理師養成は学部から始まるため，考える余裕があまりありません。その意味では，とりあえず公認心理師へのレールに乗ろうという学生の気持ちも理解できます。しかし，学生自身，あるいは実習先や将来のクライエントの利益を考えると，なされるがままレールに乗って進んでいくことは望ましいことではありません。大学側は早い段階から公認心理師の実情を丁寧に説明し，学生には自らの力で考えてもらう必要があります。高校への出前授業でも「カウンセラーについて話してほしい」という依頼がしばしば来ますが，こうした出前授業もそのためのひとつの重要なチャンスになるのかもしれません。

また，公認心理師の誕生によって，以前からある，心理学＝カウンセリングという世間一般でのイメージがより強くなる可能性があります。私自身は臨床心理学を主な専門分野としていますが，その私から見ても，このような偏ったイメージの形成は避けるべきもののように見えます。やや逆説的ではありますが，公認心理師が誕生したからこそ，心理学全体の姿とその魅力を伝えることの重要性が増してきているように思われます。

裏から読んでも心理学

人の痛みが分かる人でありたい。

慶應義塾大学文学部 准教授
平石　界（ひらいし　かい）

椅子や机を運ぶとき，何かにぶつけて思わず「いてっ」と言ってしまったこと，ありませんか。人間はどうも他者の痛みを自分のものとしがちな動物のようで，逆に，困っている人に共感せず助けないと「人でなし」なんて言われかねない。でも困っている人がいたら必ず助けるべきかっていうと，これはけっこう難しい。例えば悪い人が困っている時に助けるのは，果たして良いことなのか。悪い人が困っている時に助けなかった人が困っている時に助けることは？　そもそも良いとか悪いとかって何なの？

この難問を「情けは人のためならず」というフレームから議論してきた人たちがいます。他人を助けると巡り巡っていずれは自分に返ってくると諺は言うけれど，そんなこと本当に実現しうるのか。前提を絞ると数学的に研究できると言うのです。助けることのコストはどれくらいで，助けてもらうことの利益はいかほどか。善悪の基準はどうなってるか。諸々を設定して計算する。そう，Ohtsuki & Iwasa（2004；2006）みたいに。すると「善人は善人を助ける」「善人を助けない人は悪人」「悪人は助けない」「悪人を助けなくても悪人とされない」「善人を助ける悪人は善人」という条件下で「情け」が安定して巡ると分かる。何がすごいって，この納得感ある人間臭い言説が数式の解析だけから導出されているのです。

そんなわけで個人的お気に入りベスト20に入る研究なわけですが，そう上手く行く場合だけじゃないよ，という論文が出たようなので読んでみました（Hilbe et al., 2018）。先ほどの計算には，ある人（Xさん）への評価は社会で共有されているとの前提がありました。これを，人によってXさんへの評価は異なるものとする。そうすると話が複雑すぎて解析的には解けないのでシミュレーションしたそうです。コンピュータの中に何人もの仮想ニンゲン（エージェントと呼びます）を作る。各エージェントは，いつ助けるか，何を善または悪とするか，各々なりのルールを持っています。それらが相互作用する仮想社会を作って，どういうエージェントの集まりなら「助け合いの輪」が循環するか，試してみた。

どうなったか。Xを悪人と思っているAさんが居たとしましょう。AはXを助けません。するとXを善人と思ってるBはAを悪人認定します。ところがAの行為を見てなかったCは，引き続きAを善人と思っています。そのためAを助けないBは，Cからすると悪人になってしまう。それでCがBを助けないと，DがCを悪人認定し……という地獄のような状況が発生しかねないというのです。

衝撃的だったのが次の段落。そういうケースをより詳しく調べるために，全員が全員を善人と思っている中で，一人だけが，間違ってある一人を悪人認定した場合に何が起きるか検討したというのです。自分がその「勘違いエージェント」になった場合を想像して絶望的な気持ちになりました。仮想社会の“神”から「あやまち」を負わされ，ために皆から爪弾きにされ，果ては「助け合いの輪」崩壊の元凶となってしまうエージェントが気の毒すぎる……。

気持ちを強くして「詳しくはこっちを」と書かれた補足資料を読みました。真理の追求に捧げられたエージェントの行末を見届けねばならないと思ったのです。そしたら拍子抜け。なんのことはない，一人だけが誤解している場面ならシミュレーションを回す必要はなくて，数式の解析でOKだったんですね。犠牲にされた仮想エージェントは存在しなかったのです。心底安堵しました。いかに科学のためであっても，犠牲は最小限に留めるべきですよね。

Profile — 平石　界
東京大学大学院総合文化研究科博士課程退学。東京大学，京都大学，安田女子大学を経て，2015年4月より現職。博士（学術）。専門は進化心理学。

私の ワーク ライフ バランス

自分だけではとれないバランス

玉川大学文学部 教授
宇井美代子（うい　みよこ）

2004年，筑波大学大学院博士課程修了。博士（心理学）。筑波大学準研究員，東京福祉大学講師，玉川大学助教を経て，2012年に玉川大学准教授（同年に結婚）。産休（2014年12月），出産（2015年1月）を経て，2016年1月に育休から復職。2019年より現職。専門は社会心理学，ジェンダー。

今号からの新連載です。近年，ワークライフバランスへの関心が社会に浸透してきました。研究者たちもワークに偏ることがしばしばで，また「ライフ」という名の「アンペイドワーク」も存在します。将来の仕事の見通しがない若い時分に，出産・育児に時間を割いたり，家族を経済的に支えるために仕事を選ぶ余地がなかったり，親の介護に追われる研究者たちは，今後ますます増えるでしょう。そこで，ワークライフバランスに努力を続けてこられた研究者の方々に，そのヒントを語っていただきます。

初回は，夫婦とも大学教員として働きながら，子育て真っ最中の宇井美代子先生です。

大学院在籍時に知り合い，現在は私と同じく大学教員をしている夫と結婚し，4歳になった娘が一人います。結婚や娘の誕生は自分のワークライフバランスを見直す大きな転機となりました。

出産をする前までは，要領の悪いこともあり仕事を最優先に考え，私生活は後回しにしていました。私のほうが夫よりも先輩にあたるので，私が早く任期のない常勤の職に就かなくてはという思いもあり，（別の要因もありましたが）夫との結婚は30代後半でした。その結果，というわけでもありませんが，娘を授かったのはさらに遅く，高齢出産となりました。

娘が生まれると，娘の世話に大きく時間がとられ，仕事を優先したいとは言ってられなくなりました。「子どもが生まれたときこそ仕事をして，周りから非難されないようにするものだ」とある先輩研究者から言われたことも圧力となり，仕事の時間をうまくとれないことがストレスにも感じていました。しかし，同時に「もっと子どもと一緒にいればよかった」という先輩ママでもある先輩研究者の声もよく聞きました。私自身も娘がかわいくて仕方ありませんので，「どうせ仕事はできないのだから，娘と一緒にいられる時間は仕事を考えない」ことにし，仕事は原則として娘が保育園に行っている間と寝ている間，と割り切りました。仕事ができる時間が限られますので，夜は娘と一緒に早く寝て，朝早く起きて一仕事をする生活スタイルに変え，いかに効率的に仕事を進められるかを考え，5分や10分の細切れの時間に1行でも2行でも文章を書き……，とするようにしました。仕事に時間を割り振っていた以前よりも効率的に仕事ができている感覚もあり，割り切ったおかげで娘や夫との時間も楽しむことができるようになりました。

もし夫が「家事・育児は妻の仕事」と思うような人であったなら，このような割り切りはできなかったと思います。「なんで私だけが仕事をあきらめなくてはいけないのか」と思っていたかもしれません。しかし，夫は「男でも女でも家事・育児をすることは当然で，『手伝う』という表現はおかしい」と常々言っている人です。結婚当初から料理は基本的に夫が当然のようにしてくれますし，娘の離乳食も楽しんで作っていました。私が仕事や趣味で1日家を空けても娘と楽しく過ごしているようです。このような夫ですので，子どもの誕生後にスキューバダイビングのライセンスを取りに1泊するときも快く送り出してくれ（むしろ勧められ）ました。娘誕生後のほうが私の趣味は広がっています。

さらに，職場の環境も大きいと感じています。当時の学科主任（現・学部長）に「いずれは子どもが欲しい」旨を結婚直後の世間話の際に伝えていたら，その後，私がいつ産休・育休に入ってもよいように，「もし子どもができても，A先生が引き継いでくれるから，いつ産んでも大丈夫だからね！」と安心できる環境を整えてくださいました。また育休に入るときには「1年後の復職を待ってるよ！」，育休からの復職後も，保育園の送迎がしやすいようにと，授業や会議の時間帯にも配慮していただいています。このように育児を応援してくださる環境を整えてくださっているので，安心して仕事や育児に取り組めます。

仕事上ではご迷惑をかけているところも多いと思います。しかし自分の割り切りだけではなく，生活を分かち合う夫の存在と安心できる職場環境により，仕事と私生活とを分けることが，それぞれをさらに充実させ，私にとって「ちょうどよい」ワークライフバランスになっていると感じています。

こころの測り方

コルチゾールからストレスを知る

東海学園大学心理学部 助教
山川香織（やまかわ　かおり）

ストレスを測るにはどんな方法があるでしょうか。「どのくらいストレスを感じていますか？」という質問を思い浮かべた方もいらっしゃるでしょう。ストレス研究では，より詳細に検証するために，回答や行動だけでなく生理反応を測定します。今回は，近年のストレス測定で特に重要視されているコルチゾールという生化学的指標を紹介します。

コルチゾールとは

コルチゾールとは，副腎皮質から分泌されるステロイドホルモンの一つです。面接など心理社会的なストレッサーにさらされると，わたしたちの身体ではさまざまなシステムが活性化し，身体の状態が調整されます。そのシステムの一つが，視床下部－下垂体－副腎系（HPA系）です。ストレスが負荷されると，視床下部からコルチコトロピン放出ホルモンが分泌され，これが下垂体からの副腎皮質刺激ホルモンの分泌を促し，コルチゾールが血中に分泌されます。血中のコルチゾールと唾液中のコルチゾールは高い相関を示すことから，唾液中コルチゾールは非侵襲的かつ簡便に測定できる指標として広く用いられています。

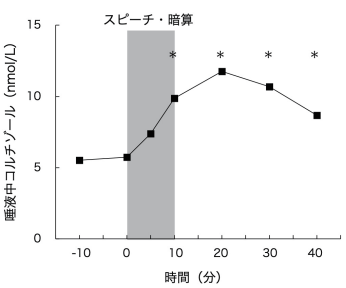


図1　急性ストレスに対する唾液中コルチゾールの反応。Izawa et al.（2008）のデータをもとに図を作成。* はベースライン（-10 分）からの有意な上昇を示す。

コルチゾールは糖新生や免疫系の調整を担っています。これらの生理的作用により，外敵に遭遇するといった危機的状況において，戦うか逃げるかといった対処（闘争か逃走反応）が可能となります。さらに，糖質コルチコイド受容体などを介して，意思決定などの認知機能や情動に影響を与えることも報告されています（山川・他，印刷中）。コルチゾールは環境の変化に合わせて，身体面だけでなく心理面や行動をも最適な状態になるよう調整するはたらきがあるのです。

ストレス研究とコルチゾール

実験室下での急性ストレス反応を検討する際には，トリア社会的ストレステスト（TSST）という課題が用いられます。この課題は，スピーチの準備（10分間），評定者の前でのスピーチ（5分間）および暗算課題（5分間）で構成されています。コルチゾールは，コントロール不可能性と社会的評価による脅威に対して高い反応性を示すことが報告されており，この要素を含むTSSTは標準的なストレス課題として，最もよく用いられています。多くの場合，コルチゾール反応は課題後20分ほどで最大値を示し，徐々に低下していきます（図1）。TSSTはその有用性から，子供用や集団用などさまざま開発されています。

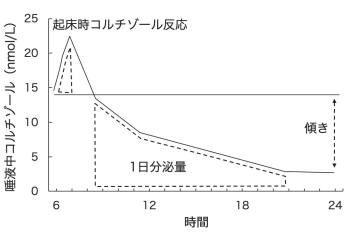


図2　日常的なストレスに関わるコルチゾール指標。井澤・他（2010）のデータをもとに図を作成。

一方，日常的なストレスをフィールド研究などで検討する場合には，起床後30～40分にかけて生じるコルチゾール反応（CAR）が広く用いられています（図2）。CARの増加は職業性ストレスや抑うつなど心理社会的変数と関連することから，信頼性の高い指標のひとつとして知られています。この他にも一日分泌量や朝と夜の分泌量の傾きといった指標がありますが，それぞれ測定ポイントが異なるため，研究目的や制約に合わせて適切な方法を選択しましょう。

コルチゾールを測定するには

コルチゾールは唾液試料から採取可能です。代表的な採取法は，スワブ（図3）を用いた方法と，流涎法です。スワブを用いた方法は，スワブを口に入れ舌下に留置して，スワブに唾液を含ませるだけなので，幼児や高齢者でも簡便に採取できます。流涎法は，自然に分泌された唾液を口の中に溜め，ストローを用いて容器に採取する方法です。この方法は採取時に唾液量を確認できるという利点もありますが，採取しにくく，事前の練習が必要となります。スワブの素材により測定値が歪むことも報告されていることから，近年では流涎法を用いた研究が増えつ

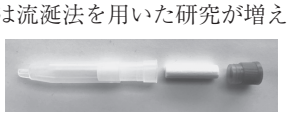


図3　唾液採取用スワブ（ザルスタット社製サリベット）

つあります。どちらの方法でも，採取後できる限り早く冷凍することが望ましいでしょう。

得られた唾液試料からコルチゾール量を測定するためには，酵素免疫測定法（ELISA）という生化学的な分析方法が用いられます。これは，コルチゾールに特異的に結合する抗体を利用して，唾液試料中のコルチゾール量を測定する方法です。予め抗体が固定された96穴のマイクロプレートに唾液試料や試薬を入れて，抗体と唾液試料中の抗原を結合させます。その後，発色作用のある試薬を注入すると，抗原量の程度によって発色の強さが変化するため，その値から抗原量を推定できます。

コルチゾール測定の留意点

コルチゾールは様々な要因の影響を受けることから，適切なデータ収集のために留意すべき点がいくつかあります。まず，実験前の制限事項として，唾液採取1時間前の飲食や激しい運動は避ける必要があります。また，アルコール摂取，薬物の服用，喫煙をチェックし，該当するようであれば研究対象から除外すべきでしょう。次に，実験時間の設定についてです。コルチゾールは日内変動があり，朝に高い値を示し夜にかけて低下していくため，朝の実験実施は避けましょう。さらに，ベースライン値や反応性には性差があることも報告されています。女性では性周期が大きく影響することから，できる限り性周期を統制することが望ましいでしょう。フィールド研究では協力者が採取を行うことから，採取方法の遵守度が結果に大きく影響します。協力者が手順を理解しやすいよう教示内容を工夫することも必要です。

新たな測定方法

最近では，毛髪や爪に含まれるコルチゾールを測定した研究が増えてきました。毛髪が形成される際，毛細血管からコルチゾールが拡散されます。毛髪は1ヵ月で1cm伸びるため，根元から1cmの毛髪に含まれるコルチゾールは1ヵ月間に蓄積されたものと考えることができます。爪の場合，形成される際付け根にある爪母基を介してコルチゾールが輸送されます。爪が先端まで伸びるのには数ヵ月を要するため，数ヵ月前のコルチゾール値を表していると考えられます。唾液は短時間の状態を反映する点に対し，毛髪や爪は過去数ヵ月の状態を反映すること，採取および保存がより簡便であることから，慢性的なストレスマーカーとして期待されています。

コルチゾールと認知機能

コルチゾールの魅力はバイオマーカーとしての有用性だけではありません。コルチゾールは糖質コルチコイド受容体などを介し，意思決定などの認知機能に作用することが報告されています（山川・他，印刷中）。例えば，急性ストレスによって分泌されたコルチゾールが，リスク選好のような非合理的な意思決定傾向を強める可能性が示唆されています。このように，コルチゾールと認知機能の関連を検証することで，ストレス暴露という環境変化に応じて，心的活動がどのように最適な状態へと調整されているかを明らかにすることができるのです。しかし，この関連性については不明な点も多く今後の解明が望まれます。

コルチゾールを測りたい！という方へ

ストレス研究においてコルチゾールを採用する最大のメリットは，非侵襲的な方法で簡単にストレス反応を測定できることです。しかし，実験計画には様々な制約があり，生化学的分析のための設備も必要となることから，初学者には「簡単に」とはいかないかもしれません。そんなときにおすすめの方法が共同研究です。すでに生化学的指標を取り扱っている研究者を見つけることができれば，これらの問題をクリアできる可能性があります。そのためには，日本生理心理学会など関連学会への参加が近道でしょう。生化学的指標を扱う研究者が集う，精神神経内分泌免疫学研究会（http://jpnei.org/）も開催されていますのでぜひご参加ください。

めまぐるしく変わっていく環境に適応すべく，わたしたちの心身は常に変化し続けています。だからこそ，わたしたちはストレスに伴う現象を多角的な視点で見つめながら，それを知るためにさまざまな道具を手に入れていく必要があります。そして，それらの道具を鮮やかに使いこなし，環境・心・身体の調和を解き明かしていくことこそ，ストレス研究の醍醐味だと思うのです。

文　献

Izawa, S. et al.（2008）Salivary dehydroepiandrosterone secretion in response to acute psychosocial stress and its correlations with biological and psychological changes. *Biological Psychology, 79*, 294-298.

井澤修平・他（2010）唾液中コルチゾールによるストレス評価と唾液採取手順　労働安全衛生研究, *3*, 119-124.

山川香織・他（印刷中）ストレス下における不合理な意思決定：認知機能の側面から　生理心理学と精神生理学, *36*.

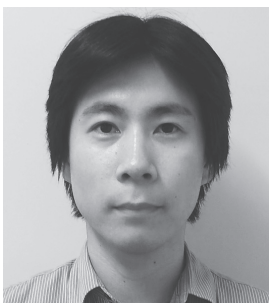
Profile — 山川香織

2016年，名古屋大学大学院環境学研究科博士後期課程修了。博士（心理学）。2018年より現職。専門は生理心理学，精神神経内分泌免疫学，ストレスと認知機能。

この人をたずねて

関西学院大学社会学部 教授
清水裕士 氏

インタビュー
武藤拓之



Profile―しみず　ひろし
2008年，大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程単位取得退学。広島大学大学院総合科学研究科助教，関西学院大学社会学部准教授を経て，2018年より現職。専門は社会心理学。著書は『個人と集団のマルチレベル分析』（ナカニシヤ出版），『社会心理学のための統計学』（共著，誠信書房）など。

■清水先生へのインタビュー

――先生の研究テーマについて教えてください。

社会の中で人々が価値や信念を共有するメカニズムに興味があります。大学院生の頃は恋愛関係や友人関係のような親密な対人関係における利他性の信念について研究をしていました。現在は，不平等な分配は望ましくないという価値観が成立する理由や，人々が右・左といった政治的イデオロギーを持つメカニズムなどについて研究しています。またこれらのテーマについて，数理・統計モデリング的なアプローチで研究するのが最近の関心です。

――先生が統計学に関心を持たれたきっかけを教えてください。

もともと数学は好きでしたが，計算間違いが多くてあまり得意ではありませんでした。実際，高校時代は文系で，学部も社会学部を選びました。ただ，数学や物理学が好きだったので，文系の中で理系的なことをしたいと思って社会心理学を選びました。社会心理学のゼミに入ってから，当時大学院生だった小杉考司さん（現・専修大学教授）から因子分析を人間関係分析に応用するという考えを聞いて影響を受けたのも大きいです。同世代で一番になれるものを伸ばせという小杉さんの言葉を真に受けて，因子分析や線形代数の勉強を始めました。素直な子だったので（笑）。その後，大学院で恋愛関係について研究しているときにマルチレベル分析と出会いました。マルチレベル分析ではペアが共有している分散を推定するのですが，これが因子分析と対人関係を結びつけるモデルであることに気づき，「これしかない」と感じました。マルチレベル分析について勉強する過程でいろいろな文献を読んでいるうちに統計に強くなり，今に至ります。個人的には，単に統計が好きというよりは，学問的な関心を数理的に表現するのに役立ったという印象です。

――清水先生はフリーの統計分析プログラムのHADを配布されていることでも有名ですが，HADを開発された経緯について教えてください。

大学院生のときに，マルチレベル分析を実行するためのデータの下処理（相関や平均値の計算，欠損値処理など）をするマクロを書いたのがHADの始まりです。その後，メルボルン大学に留学していたときに階層的重回帰分析のプログラムを書いてみたくなって，やってみたら意外とウケが良くて。それから広島大学に赴任して，院生に「分散分析もできないか」と言われたことをきっかけに分散分析の機能も追加しました。こんな感じで，自分の統計の勉強も兼ねてどんどん機能を追加していくうちに今のような形になりました。よく「車輪の再発見」だとかも言われましたけど，僕にとっては成長につながったので良かったと思っています。もともとマルチレベル分析の下処理のためのプログラムだったのに，最終的にはHADだけでマルチレベル分析ができるようになったというところが僕にとって結構エモいところです（笑）

――それはエモいですね！　ところで，HADって何の略ですか？

諸説あります（笑）

――統計モデリングは心理学研究にどのように利用できますか？

因果効果があることが実験的に示されている現象のモデリングが一番やりやすいと思います。例えば遅延価値割引や，武藤さんがやっている心的回転あたりは好例ですね。主効果が出て終わり，というのが今までの実験心理学でしたが，その効果の背後にあるメカニズムを数学的に考えるのがモデリングです。ただし，モデリングだけでは重要な変数を見落としてしまったり，疑似相関の可能性が常にあります。そこで，モデリングで見出されたパラメータを実験的に操作したときに実際の行動が

変化することを確かめるための新たな実験が必要となります。このように実験とモデリングを交互に繰り返すことで，詳細なメカニズムの探究と再現性の担保の両方を少しずつ実現できると考えています。複雑な実験計画を立てるよりも，シンプルな因果効果のメカニズムの詳細を明らかにしたほうが，他の社会科学者からの理解も得られやすくなると思います。

――これから統計学や統計モデリングをきちんと学びたい心理学者へのアドバイスをお願いします。

統計学を勉強するのはすごく大事なことです。最初は従来の心理統計の勉強から始めても問題ないと思います。その蓄積がその後のモデルの勉強につながります。最初の目標としては一般化線形混合モデル（generalized linear mixed model：GLMM）を勉強するのが良いと思います。加えて，モデリングをやりたい人は，まずは数学の基礎（とくに対数と指数）から勉強するのが大事です。これが今の心理学者にとっての大きな壁だと思っていて，ここを乗り越えると世界が広がります。あとは線形代数も重要ですね。

――研究が楽しいと感じるのはどのようなときですか？

筋の通ったロジックを思いついたときや，謎が解けるような仮説が浮かんだときですかね。統計モデリングや方法論で遊んでいて，ふと今まで解けなかった問題に使えることが分かると楽しくなります。例えば，潜在ランク理論で遊んでいて分布推定のアイディアが浮かんだり，遅延価値割引の考え方が不平等の研究にも使えることに気づいたり。いろいろな方法論の蓄積は，たとえるなら地面を掘るような感じで，この場所は固いなと思っても，別のところから掘れば，あるいは別の道具を使えば，意外に簡単に掘れることに気づくことがあります。「この道具を使えば掘れるかも」と気づいたときには興奮します。

――最後に，若手研究者へのメッセージをお願いします。

一つのテーマだけを追究して難問をごりごり掘っていけるのはほんの一握りの天才（生まれながらにレベル99の人）だけな気がします。凡人にできるのは，いろいろなことをやりながら自分のレベルを上げて，難しいダンジョンに挑む前に今攻略できるダンジョンで経験値を稼いで武器を集めながら進んでいくことです。そういう意味でも，若いうちから方法論や数学，（僕は苦手ですが）英語といった広い意味での共通言語を勉強しておくことはすごく大事だと思います。

■インタビュアーの自己紹介

インタビューを終えて

私が初めて清水先生とお会いしたのは，2015年の夏に行われた，*Bayesian cognitive modeling: A practical course*（Cambridge University Press）の読書会に参加したときでした。自己紹介の際に清水先生から「好きな確率分布は？」と尋ねられたのをよく覚えています。その後，ベイズモデリングに関するワークショップや書籍『たのしいベイズモデリング』（北大路書房）の執筆など，一緒にお仕事をさせていただく機会が何度かありました。

私自身，数理モデルや統計学にはもともと強い関心を持っていたため，様々な統計手法や数理的なアプローチを取り入れながら心理学の研究をされている清水先生はまさに憧れの存在でした。今回のインタビューを通じて清水先生に語っていただいた研究哲学は，私自身の今後の道しるべでもあるように思います。

現在の研究テーマ

私は，人の空間的思考を支える認知メカニズムの解明を目指して研究を行っています。例えば，目の前に存在する物体が回転するところを想像する認知過程（物体の心的回転）や，自分とは異なる視点から見た物の見え方を想像する認知過程（視空間的視点取得）などについて，主に実験による検証を行っています。研究成果の一つとして，人がある種の視空間的視点取得を行うときに，取得する視点の位置まで自分自身の身体を移動させるような運動シミュレーションを実行していることを示す証拠を得ることに成功しています。また，空間的思考や記憶などを含む認知機能の加齢変化のメカニズムや機能を明らかにするために，高齢者を対象としたフィールド調査にも携わっています。

最近は，統計モデリングを用いた様々な認知過程の数理表現にも関心を持っています。先に述べた空間的思考に関する実験的研究や認知加齢の研究にも統計モデリングの手法を取り入れて様々な検証を行っています。

Profile―むとう　ひろゆき
日本学術振興会特別研究員PD（立命館大学OIC総合研究機構）。2019年3月，大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程修了。博士（人間科学）。専門は知覚心理学，認知心理学。論文はSpatial perspective taking mediated by whole-body motor simulation（共著，*J Exp Psychol Hum Percept Perform*）など。

神戸親和女子大学

発達教育学部心理学科
辻川典文（つじかわ　のりふみ）
所在地：神戸市北区鈴蘭台北町 7-13-1
https://www.kobe-shinwa.ac.jp/

Profile―辻川典文
神戸親和女子大学発達教育学部心理学科准教授。専門は社会心理学。著書は『心理学の最先端：「こころ」のしくみを解き明かす』（分担執筆，あいり出版）など。

はじめに――
神戸親和女子大学の成り立ち

神戸親和女子大学は，学校法人親和学園によって1966年に兵庫県神戸市北区鈴蘭台にて開学しました。設立母体である学校法人親和学園は，1887年（明治20年）に創立された親和女学校を創始としており，神戸では地域の人々に親しまれた歴史のある学校です。親和女学校は設立時より「新しい女性の創造」を目指し，「社会において自立して活躍する女性の育成」を建学の理念として掲げました。この建学の理念は，今日まで130年有余にわたって，脈々として継承されています。また，「誠実」「堅忍不抜」「忠恕温和」という校訓があり，いわば，人間としての普遍的な生き方を示す教育的価値として，今日まで親和学園の教育を支え続けています。

神戸市北区にあるメインキャンパスは，神戸市中心部である三宮からスクールバスで約30分，自然の多い閑静な住宅街の中にあります（写真1）。現在は文学部と発達教育学部の2学部および大学院2研究科を擁する大学となっています。また，通信学部も併設しており，神戸市中央区の三宮にキャンパスを構えています。

心理学科の学び――多様な学びを活かした三つのプログラム

神戸親和女子大学の心理学科は，1998年の文学部人間科学科から始まり，その後，学科改変等を経て発達教育学部心理学科となりました。心理学科では，学生の進路と関連づけて「公認心理師・臨床心理士（心の専門家）プログラム」「現代女性のための心理学プログラム」「子どものこころがわかるプログラム」の三つのプログラムがあります。なお，このプログラムは学びの指針であり，学生の興味に合わせて一つのプログラムを集中的に履修することも，二つでも三つでも複数のプログラムを学ぶことも可能となっています。

「公認心理師・臨床心理士（心の専門家）プログラム」では，心理臨床の基礎的知識から心理療法まで幅広く学び，心理学の知識をもとに人々の幸せや健康を支援する力を身に着けていきます。大学院と連携しながら6年一貫での教育体制をとり，公認心理師と臨床心理士の二つの心理の資格取得を目指します。また，大学院進学のためのサポート体制もあり，セミナーの実施や心理学英語の講義など，院への進学に必要な専門知識と英語力の向上を図ります。科目としては，「心理的アセスメント」や「精神疾患とその治療」，「心理学的支援法」など国家資格である公認心理師の資格取得に必要な科目を中心に，心理臨床の力を養うために必要な科目があります。

「現代女性のための心理学プログラム」では，心理学の知識を活かしさまざまな社会場面で活躍することのできる能力を身に着けることを目的としています。心理学＝カウンセラーというイメージがあるなか，本学の心理学科では，心理学の知識を広く社会で活かせるようさまざまな心理の学びがあります。日常生活における色の効果と心理の関係を学ぶ「色彩心理学」，化粧やファッションにおける心理学的アプローチを学ぶ「粧いの心理学」，購買・消費行動における人々の心理を学ぶ「消費者心理学」，他にも「産業・組織心理学」「キャリア支援の心理学」「音楽心理学」「スポーツ心理学」「自然環境と心理」など，さまざまな心理学を学びます。

写真1　神戸親和女子大学鈴蘭台キャンパス

「子どものこころがわかるプログラム」は，子どもの心身の発達を理解し，サポートすることのできる能力を養うことを目的としています。このプログラムでは，子どもが抱えるさまざまな困難を解消するうえで，子どもの視点に立って考えることの重要性，子ども本人や周囲の人に寄り添うことの大切さを学びます。科目としては，発達および発達過程についての基本的な知見や理論を学ぶ「発達心理学概論」や子どもが体験している世界を発達段階に合わせて体系的に学ぶ「子どもから見た世界」，他にも「福祉心理学」「発達臨床心理学」「障害者・障害児心理学」などがあります。

実践的な学びの場

本学科では心理学の学びを深めるさまざまな実践的な実習や演習科目があります。実習科目としては，基礎的な心理学の実験や調査手法を学ぶ「心理学実験・実習A・B」とその発展版の「心理学実験」，医療，福祉，教育，司法，産業などといったさまざまな場面での心理専門職の役割を学ぶ「心理実習」，子どもと触れ合いながら，子どもの心理やアプローチの方法を体験的に学ぶ「子ども実習」，実験や調査を通して人間関係や購買行動の不思議を学ぶ「社会心理学実験・実習」などがあります。また，カナダ（トロント）での短期間の研修を通して，海外での教育・医療現場における心理学の役割について学ぶ「海外心理学研修」もあります（写真2）。演習科目としては，2年次に研究の基礎を学ぶ「心理学基礎演習」，3，4年次には自ら研究テーマを設定し，心理学を深く研究する「心理学専門演習」があります。いずれも少人数のゼミ形式であり，小規模な本学科独自のきめ細かな指導を実施しています。

写真2　海外心理学研修の様子

卒業後の進路

心理学科の学生は，各プログラムに関連したさまざまな進路に進んでいます。「公認心理師・臨床心理士（心の専門家）プログラム」では，大学院へ進学し，公認心理師と臨床心理士の資格を目指します。そして，専門家として教育現場や福祉現場，病院などさまざまな場所で活躍しています。「現代女性の心理学プログラム」では，多様な心理の学びを活かし，アパレル関係や金融関係，自動車関係，不動産関係などといった一般企業に就職している学生が多くいます。また，「子どものこころがわかるプログラム」では，子どもに寄り添える力を身に着け児童関連施設に就職する学生や，本学の通信教育を併修し教員免許を取得し，子どもの心理に寄り添える教員を目指す学生もいます。

大学院での学び

本学の大学院，心理臨床学専攻は2002年に開設しました。心理臨床学専攻では，学生は臨床心理士や公認心理師の資格取得を目指すことはもちろん，人々の心の発達を支え，心のケアを必要としている人々を支援することのできる心理臨床家を目指しています。本学大学院は臨床心理士養成第一種指定校であり，これまで多くの臨床心理士を輩出してきました。そして，国家資格である公認心理師の養成カリキュラムにも対応しており，二つの資格を取得した修了生もいます。臨床心理士と公認心理師の二つの資格を目指すことで，心理臨床家としての専門性を高めるとともに，医療，福祉，教育，産業，司法などといったさまざまな領域の専門家たちと協働できる力を身につけます。大学院修了後の主な進路としては，小中高のスクールカウンセラーや教育研究所・総合教育センターなどにおける相談員，病院，精神保健センターなどで勤務しています。

おわりに

最後に心理学科の学生の様子を紹介します。本学科にはさまざまな思いを持って勉学に励む学生がいます。クラブで大きなけがをしたことがきっかけで人の心を支えたいという思いを持った学生，スクールカウンセラーに助けられた経験から自分も同じようにカウンセラーの道に進もうとする学生，発達障がいや虐待の問題に取り組みたいとボランティア活動を続ける学生，ファッションや化粧に興味を持ち，色についての心理学を学ぶ学生，人を楽しませることが好きで人の気持ちを学び起業を目指す学生などなど。小さな女子大学ではありますが，学生一人ひとりが強い思いを持って活動をしています。

神戸親和女子大学の心理学科に興味を持った方はぜひ一度，本学のオープンキャンパスなどにご参加ください。また，紙幅の関係で紹介できなかった内容については，本学のホームページに詳しい内容を掲載しております。興味を持たれた方は，ホームページの方もぜひご覧ください。

ベルギー・ドイツの大学で働く

ミュンヘン大学心理学部 PD研究員
高野慶輔（たかの　けいすけ）

Profile―高野慶輔
2012年，東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了。博士（学術）。日本大学文理学部とルーヴェン大学でPD研究員を経て，2017年より現職。専門は臨床心理学。著書は『計量パーソナリティ心理学（クロスロード・パーソナリティ・シリーズ3）』（分担執筆，ナカニシヤ出版）など。

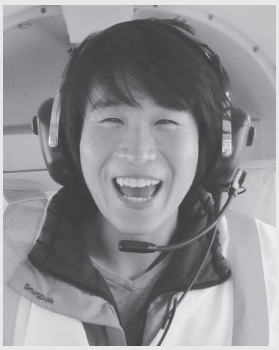
私は2012年に博士号を取得し，日本大学でポスドクを1年ほど続けた後，ベルギーのルーヴェン大学（KU Leuven）へ移りました。ルーヴェンは，ブリュッセルから電車で15分ほどの距離にある小さな大学都市で，オランダ語を主要言語とします。ルーヴェンで3年半ほど勤務し，その後ドイツのミュンヘン大学（LMU Munich）に移り2年が経ちました。

思い返してみますと，博士号取得後はどこか別の国で働くことをおぼろげに考えていました。ラボの選択の基準として，①非英語圏であること，②独立した研究ができること，③PI（Principal Investigator）が若く比較的近い目線でディスカッションができることを重視しました。特に一点目に関しては，英語を母語としない研究者が高い生産性を維持する秘訣を知りたかったという動機がありました。折しも大学院の先輩がゲントにおられ，ベルギーの様子を伝い知ることができたことも一つの要因だったかもしれません。ルーヴェンで所属したチームは学習心理学と精神病理学を専門としており，固めの学習屋と臨床心理屋が混在するというすこし風変わりな部署でした。チーム全体のテーマは「精神病理と記憶」ということでしたので，マウスで不安の消去をやる人もいれば，急にナラティブを始める人もいるというように，方法論的にはかなり自由な環境でした。私自身はフィリップ・ラース（Filip Raes）教授をメンターとしていましたので，うつと不眠における認知バイアスと自伝的記憶の研究を行いました。幸いにも共同で書いたグラントが当たり，今でもルーヴェンとは学生の指導などを含めて密なやりとりがあります。これらのグラントは自分自身を雇用できないタイプのものだったので，フェローシップの切れ目で結局ドイツのミュンヘン大学に移ることになりました。こちらは打って変わって臨床の色が強いラボです。また大学の仕組みもいわゆる講座制で，トーマス・エーリング（Thomas Ehring）教授をトップとして臨床心理学と心理療法の研究を行っています。同僚の多くはセラピストを兼業とし，臨床・研究・教育を可能な限りバランス良く行うというような体制になっています。私自身は臨床をしない（できない）研究者として，自身のプロジェクトを遂行する他，同僚の研究のサポート（実験デザインの立案，プログラミング，統計モデリング等）と修士向けの授業を担当しています。ドイツ式の教育についてはさっぱりなもので，いつも助けてくれる同僚には感謝しかありません。

日本，ベルギー，ドイツと三つの国でポスドクを経験しましたが，最も印象的な違いは，ベルギー・ドイツでは博士課程の学生は研究・教育を「仕事」とし，何らかの給料を得ている点でした。無給のポスドクや研究生というのも聞いたことがありません。その意味で若手研究者に対するサポートは欧州のほうが手厚い，あるいはそのような機会が多いように感じました。一方で，修士と博士ははっきりと区別されています。自分のプロジェクトを持つのは博士課程からのことが多く，例えば大学院5年のような体制にはなっていません。その分，日本の大学院生はより早熟で専門的な知識を持っているように思います。精神病理学でも特に行動を扱うものに関して言えば，日本と欧州でハードウェア面で技術的な差を感じることはありませんでした。インターネットのおかげで遠隔地でのミーティングも可能ですので，研究はどこにいてもできるのではないかと思います。反面，本当に多様な人材がひしめいていますので，欧州のほうがその分野の先達や同好の士を探すには良いかもしれません。加えて「直接知っている」というのも重要らしく，私自身は日本を出てから色々な研究に誘ってもらえる機会が増えました。月並みですが，そういった意味では日本に閉じこもらないほうがよいのかなあと感じています。

英国での研究資金について

ロンドン大学ユニバーシティカレッジ生命科学部 シニアリサーチフェロー
石津智大（いしづ　ともひろ）



Profile―石津智大
2009年，慶應義塾大学大学院社会学研究科心理学専攻後期博士課程修了。博士（心理学）。同年10月に渡英し，ロンドン大学ユニバーシティ校とオーストリアのウィーン大学で研究教育を行う。2018年より現職。専門は認知神経科学。論文は「神経美学の功績：神経美学はニューロトラッシュか」など。

私は今年で欧州滞在10年目となります。英国のロンドン大学ユニバーシティ校（UCL）とオーストリアのウィーン大学で研究教育を行ってきました。今回は英国で研究するためのファンディングについて書こうと思います。

ロンドン大学は19校からなる名目カレッジ制で，UCLはその中で1826年に最初にできた大学です。海馬研究でノーベル賞を受賞したJohn O'Keefeらが所属し，生命科学や脳科学に強みのある大学です。UCLは，設立当初より「全てのひとに開かれた大学を」という高等教育の大衆化を掲げています。当時，大学といえばケンブリッジとオックスフォードで，保守的な入学要件がありました。それに対しUCLは，自由主義・平等主義にもとづき，人種や宗教にかかわらず入学を許しました。明治政府の設立に深くかかわった伊藤博文らもUCLで議会政治や工学などを学んでいます。

英国では，初等中等教育の管轄は教育省ですが，高等教育は，ビジネス・エネルギー・産業戦略省（BEIS）という科学イノベーションや産業振興を所管する省の管轄です。つまり，高等教育は，英国の将来を担う産業や技術革新につながる布石として明確に位置づけられているのです。一方で，伝統的に大幅な自治が認められており，各大学で特色のある文化・研究が醸成され，それが英国の科学を下支えしているといえるでしょう。

例えばUCLはヒト脳研究に特色があり，Wellcome Trust Centre for Neuroimaging（FIL）は，認知神経科学の欧州中心地の一つです。四つのMRI，脳波・脳磁計，多数の心理実験室と，充実した実験施設を備えています。毎週著名研究者を招いてセミナーがあり，最新の研究動向に触れることができます。

英国にはいろいろな研究費があります。基礎研究への主な助成機関は，生物科学，芸術人文学など，領域別で構成される7つの研究会議です。国の包括的目標にどのように投資するか計画を提出し，BEISから予算の配分を受けます。政府系以外にも王立協会や英国学士院などが，研究者への資金配分を行っています。このようなグラントは，基本的にはPIが代表となり申請することが必要です。ところが，例えばオーストリアでは，非PIでもグラントの代表になれます。海外で研究を考える若手ポスドクの方は，その国のグラントの仕組みを考慮して計画に組み込むとよいでしょう。

慈善団体による研究開発への支援も，英国の科学の特徴の一つです。慈善団体は，公的資金とは異なり，各団体の特徴に沿った方針でファンドできます。FILを支援しているウェルカム財団は，製薬実業家Sir Henry Wellcomeの遺産をもとに，生命医学分野で先端的な研究へ助成を行っています。ユニリーバを母体とするリバヒューム財団は，領域横断型の研究支援に重点をおいています。そのお陰で，私も去年から当財団から大型グラントを受け，感性と芸術がどのように社会で共有されるかの脳科学研究を進めています。

若手の方が海外で研究を開始するのに，手始めとなるのがフェローシップです。国内のもの以外に，直接欧州のスキーマに応募する手もあります。欧州研究会議のMarie Skłodowskaa-Curie actions，オーストリアのLise Meitner Programmeなどは，外国人研究者が欧州へ移動し研究によって技術移転するという条件がついたスキーマです。人的資源の流動性を図り，欧州の科学力向上を意図するものです。欧州域外からの申請は多様性の担保にアピールでき，日本からの応募もそうした点が勘案される場合があります。Human Frontier Science Programでは，生物学系への転向が条件です。特殊な要件ですが，逆に自分の方向性が合っていれば，それだけ有利になります。このように，それぞれ独自の特徴があり，英国，欧州で研究したい方はまず自分の状況に沿うものがないかみてみるとよいでしょう。

このコーナーは新刊の心理学関連書籍を著者自らにご紹介いただくコーナーです。

感情とはそもそも何なのか

現代科学で読み解く感情のしくみと障害

乾　敏郎

著　　乾 敏郎
発行　ミネルヴァ書房
四六判／210頁
定価　本体2,200円＋税
発行年月　2018年9月

いぬい　としお
追手門学院大学心理学部教授，京都大学名誉教授。専門は認知神経科学，認知科学。著訳書はほかに『脳科学からみる子どもの心の育ち』（ミネルヴァ書房），『イメージ脳』（岩波書店），『Q&A でわかる脳と視覚』（サイエンス社），『階層ベイズモデルとその周辺』（共著，岩波書店），『脳の学習力』（共訳，岩波書店），『認知発達と生得性』（共訳，共立出版）など。

ここ4～5年の間に革命的な出来事がありました。技術の進歩によって，うつ病の脳の炎症が観測できるようになったこともその一つかもしれません。ただそれ以上に重要な出来事は，感情をとらえる全く新しい枠組みが生まれたことです。

この枠組みは自由エネルギー原理と呼ばれる理論を基礎にしており，それは信念（期待）や推論など，主観をベースにした画期的な脳の大理論なのです。この理論は，Karl Fristonによって，2006年に発表されました。感情に応用された理論は，知覚の無意識的推論だけでなく，運動の能動的推論の重要性を説く2009年頃から発表された理論に基づいています。

この枠組みによって感情という主観的意識体験がうまくとらえられ，さらには感情障害をもとらえられる最新の試みを多くの学生や研究者に紹介しようと考え執筆したのが本書です。心理学や医学の最新の知見までできるだけわかりやすく紹介しましたので，心理学の分野だけでなく，医学や工学，哲学の分野の方にも楽しんで読んでいただけることを期待しています。

フェイクニュースを科学する

拡散するデマ，陰謀論，プロパガンダのしくみ

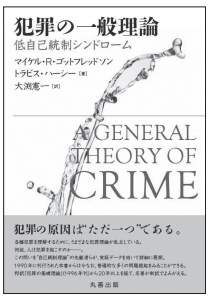
笹原和俊

著　　笹原和俊
発行　化学同人
B6判／192頁
定価　本体1,500円＋税
発行年月　2018年12月

ささはら　かずとし
名古屋大学大学院情報学研究科講師。科学技術振興機構さきがけ研究者を兼任。専門は計算社会科学。著書はほかに『行動生物学辞典』（分担執筆，東京化学同人），『進化言語学の構築：新しい人間科学を目指して』（分担執筆，ひつじ書房），『思想地図β vol.1』（分担執筆，ゲンロン），『言語科学の百科事典』（分担執筆，丸善）など。

2016年以降，嘘やデマ，陰謀論やプロパガンダ，こうした虚偽情報がソーシャルメディアを介して大規模に拡散し，現実世界に混乱や悲劇をもたらす事象が次々と発生しています。「フェイクニュース」と呼ばれているこれらの一連の現象は，私たちの日常生活や民主主義を脅かす深刻な社会問題です。

本書ではこの現象を，情報の生産者と消費者がさまざまな利害関係の中でデジタルテクノロジーによって複雑につながりあったネットワーク，つまり「情報生態系」の問題として捉え，そのしくみについて紐解きます。その目的を達成するために，計算社会科学の最新の知見を取り入れながら，虚偽情報の拡散に関わる人間の認知特性（認知バイアス，社会的影響），情報環境（エコーチェンバー，フィルターバブル），情報量の問題（情報過多，アテンションエコノミー），それらの関係性について平易な言葉で解説しました。本書がフェイクニュース現象の見通しをよくし，客観的な事実よりも個人的な信条や感情が重視される「ポスト真実」の時代を乗り越えるためのヒントとなれば幸いです。



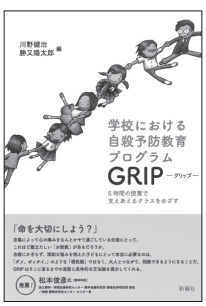
訳　　大渕憲一
発行　丸善出版
A5判／288頁
定価　本体3,800円＋税
発行年月　2018年9月

おおぶち　けんいち
放送大学宮城学習センター所長。専門は社会心理学，犯罪心理学。著書はほかに『こころを科学する：心理学と統計学のコラボレーション』（編，共立出版），『新版　人を傷つける心：攻撃性の社会心理学』（サイエンス社），『紛争と葛藤の心理学』（サイエンス社），『失敗しない謝り方』（CCCメディアハウス），『紛争・暴力・公正の心理学』（監修，北大路書房）など。

犯罪の一般理論
低自己統制シンドローム

大渕憲一

フィクションの世界では，綿密な計画に基づき，統制された行動によって犯行を遂行する窃盗団などが描かれます。世の中にこうした緻密な犯罪もないわけではないのですが，それは極めて稀で，実際の犯罪の大半は，目の前の誘惑に惹かれ，予見性や計画性を欠き，努力や訓練を必要としない衝動的なものです。この分野の研究者や実務家が薄々思っていたことをズバリと言い切ったのがゴットフレッドソンとハーシーの低自己統制理論で，その意味でこの理論はコロンブスの卵に似ています。基本概念をベンサムの古典的功利主義にまで辿り，一方，現在（1990年代後半）のアメリカの犯罪実態と犯罪諸理論を批判的に検討しながら彼らが自説を展開したのが本書です。邦訳の副題に「低自己統制シンドローム」と付けたのは，低自己統制という特性が，事故・病気，学業・職業上の挫折など広範囲の社会病理・個人病理の原因であるという著者たちの主張を汲んでのことです。この点から，本書で行われる議論には，犯罪以外の分野の心理学者にとっても興味深いものが多数含まれていると思っています。



共編　川野健治・勝又陽太郎
発行　新曜社
A5判／136頁
定価　本体1,800円＋税
発行年月　2018年9月

かわの　けんじ
立命館大学総合心理学部教授。専門は発達心理学，社会心理学。著書はほかに『心理調査の基礎』（分担執筆，有斐閣），『物語りと共約幻想（質的心理学フォーラム選書2）』（共編，新曜社），『災害・危機と人間（発達科学ハンドブック2）』（分担執筆，新曜社），『身体から発達を問う』（共編，新曜社），『災害時の公衆衛生』（分担執筆，南山堂）など。

学校における自殺予防教育プログラムGRIP
5時間の授業で支えあえるクラスをめざす

川野健治

この本では，中学生向けに開発した，5時限で構成された自殺予防教育プログラムGRIPを解説しています。心の健康教育の授業でこの本を学生に貸して，「分担して，大学生向けにアレンジして実施すること」と指示したら，後日受講生から「1, 2, 4, 5, 3」の順に実施したいと相談がありました。いや，GRIPのGはGradual ApproachのG，この順番通りに着実に進むのが大事なんだって，ということばを飲み込み「いいよ」と言いました。「（まあ）いいよ（意外に面白いかな）」。確かに本は，作ってしまうといろんな読み方ができます。特に，この本の特徴の一つは文字通りの「軽さ」，つまり分量が多くなくて，すぐ読めることです。とはいえ中身は濃いつもりで，中学校の先生にお聞きすると，本を読んで実際のツールを見ることでよりよく理解できるのだそうです。ツールをダウンロードするURLは本の中に示しています。自殺予防教育は喫緊の課題なので，学校の先生や研究者の皆さんに読みやすいと感じてもらえると嬉しいのですが，うちの学生には「ちゃんと通しで読んだ？」と確認しないと。

心理学ライフ

趣味について

慶應義塾大学 名誉教授
坂上貴之（さかがみ　たかゆき）

1984年，慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学。文学博士。慶應義塾大学文学部で助手，助教授，教授を歴任し，2019年に定年退職。専門は実験心理学（学習・行動），行動分析学，行動的意思決定。著書は『行動分析学事典』（共編著，丸善出版）など。

原稿の締め切りというのはいつも瞬く間に迫ってくる。決して締め切りに追われるのは私の趣味ではない。そもそも趣味とは道楽や娯楽などと同様，仕事や職業（勉学）としてではない「楽しみ」としての人間の活動を指す。あるサイト[1]を覗くと，好感度の高い趣味とそうでない趣味とがあるらしい。前者には順に料理，食べ歩き，ランニング（スポーツ），読書，音楽・楽器，写真，旅行（ドライブ）など，後者には笑いを取る目的もあるのか，パントマイム，狂言，引っ越し，アイドル，自分探し，地元めぐり，女子会，などが並ぶ。

また別のサイト[2]では，企業が面接で趣味を聞く理由として「趣味の内容から人間性を推し量るため」と「趣味を業務に活かせる可能性があるため」とある。それとわかった途端，自分の趣味を開陳することが恐ろしくなった。ここは料理とか，食べ歩きといっておくべきか……しかしそれでは読者は承知しまい。そこで今から10年ほど前に自己紹介用に作成した「趣味の坂上」というスライドを元に自分の趣味を控えめに語ろう。

多くの友人や学生は，私がめちゃくちゃに歩くことを知っている。自分が勤めていた大学（田町）から品川，目黒，新橋，銀座はもとより，早稲田や本郷まで歩くことはよくある。休みには，横浜駅に近い自宅から大学まで歩くこともあるが，5時間かけて一体何だという気持ちにいつもさせられるのも確かである。しかしおかげで東日本大震災の晩は，何の問題もなく帰宅できたし，旧街道や低山をめぐる旅も，スローなfast hikingも楽しくこなしている。散歩が高じてこのような趣味となったのだが，最近では8時間くらい歩くことも苦ではなくなったから，あちこちの立ち飲み屋巡りやクラフトビール醸造所巡りなども楽しめるようになった。これは歩くと呑むの合体系趣味であろう。

乗り物も好きである。自転車は今でもまだ4台有しており，うち3台が折り畳みである。残りの1台もマウンテンバイクでありながら，輪行にして持ち運ぶ。電車に持ち込む時は，少なくともネットで乗り換えを検索するような野暮はしない。あくまで紙の時刻表と青春18きっぷとの旅である。ただ，最近は歩くことが主になり，こちらの頻度は下がってしまった。

下手な横好きということわざがあるが，それを絵にかいたようなものが楽器に触る趣味である。決して演奏とは言わず，ただ弄ってみたいのである。ドラム，尺八，10ホールズのハープ，クロマチックハーモニカ，鍵盤ハーモニカ，フルート，ピッコロ，ウインドシンセ，キーボードなど。ただこの趣味は，現在仕事化を企んでおり，運動学習の新しい展開，もしくは認知症対策の切り札として，デビューさせたいと思っている。

実は下手な横好きは楽器にとどまらない。絵や書も好きで，後者は最近ご無沙汰であるが，前者はペン書きでのスケッチなど，まだ病気は治っていない。カメラにも一時はのめり込み，ローライフレックスやライカをぶらさげ120㎜，36㎜フィルムでパチパチやっていた時代がある。その出発は立体視に嵌ったことで，立体カメラの購入に始まり，2台のカメラを雲台に距離を離して載せての撮影，現在はデジタルの立体カメラへと移行している。これは知覚系合体か？　さすがに銀塩フィルムをいじる時間も資金もなくなってきたが。

最後の紹介は本についての趣味だろう。商売関係の本はさておき，自分の愉しみのための本の蒐集は比較的控えめである。写真と連動した裸眼立体視に関わる写真集や書物，粋・洒落・艶をテーマとする江戸以降の大衆文学，歌舞音曲，吉原，講談，大道芸などの本（時に変体仮名本も），川柳・俳句・警句・毒舌などの短詩文学，エスペラント語の様々な書物，自然地理や地図に関わる書物（これも時には裸眼立体視と関係する）。これら蒐集本はほとんどが自分でやってみることと合体している。

しかしこれらの趣味はよくよくみると好感度の高い趣味に入っているではないか！　だがそんなことで気を許してはならない。どんな趣味も度を越せば人はやっぱり引いてしまうからだ。結局，趣味について人はあまり多くを語ってはならないのであろう。

---

1) http://mikakukyokai.net/2016/11/23/hobby/
2) https://tech-camp.in/note/careerchange/51806/

博物館の現場から 比較認知科学を振り返って

奥州市牛の博物館 主任学芸員
森本　陽（もりもと　よう）

Profile―森本　陽
2005年，大阪市立大学理学部卒業。2010年，京都大学大学院文学研究科行動文化学専攻心理学専修博士課程単位取得退学。文学博士。同年に奥州市教育委員会歴史遺産課学芸員，2014年より現職。

私は「奥州市牛の博物館」の学芸員として働いています。牛の博物館では，世界から集めた1000点以上の資料を展示し，胃袋や骨格標本から牛の体のしくみを，農耕や乳利用の道具から牛と人とのかかわりの歴史を紹介しています。

遠足や社会科見学で博物館を訪れた地元の子ども達は，展示室入口の黒毛和種の剥製を見上げ，その大きさに圧倒されます。「清菊（きよぎく）」という名のその牛は，オスの牛であること，こんなに大きいのに，子ども達より若い2歳半（30ヵ月齢）であること，地元前沢の農家で大切に育てられたことを紹介します。そして，彼ら肥育牛は，人によって殺され，その肉は牛肉となり，我々が食べていることを伝えます。小学校低学年ぐらいまでの子どもは，その事実に「えっ？」「死んじゃうの？」と驚いた様子を見せます。牛に対する「かわいそう」と毎日の「いただきます」がつながる瞬間。その時の心の動揺を大切にしたいと思っています。

牛は，現代人が最も依存している家畜動物であると言っても過言ではありません。肉，乳製品，革製品，医薬品など，日常生活のさまざまな製品がウシ由来の素材で作られており，相当な注意を払わない限り，これらを一切利用せずに生活することは困難です。それゆえに，子どもから年配の方まで，皆に身近な命の問題を提起するのに牛が適した素材であると考えます。人と動物の関係を自分ごととしてとらえる入口になるのです。

牛の博物館の展示室にて　黒毛和種「清菊」の剥製と

大学院生時代，比較認知科学の研究室に所属していた私は，フサオマキザルの情動認識を研究テーマにしていました。素朴な疑問として，ヒト以外の動物は怖れや喜びを感じているのだろうか？　を知りたかったのですが，主観的な感情体験には科学では踏み込めません。そこで，フサオマキザルが仲間の情動表出をどの程度認識しているのか，仲間の怖れや喜びについての心的表象を持っているのか，という問いを立てて，主に行動実験を行っていました。その結果，フサオマキザルは仲間の表情に応じて，自身の行動を変化させることを明らかにできました。大学院での5年間は，動物と接して研究を行える喜びを感じると同時に，彼らの自由を科学のために犠牲にする葛藤を抱える毎日でもありました。

現在，私は牛の博物館の学芸員となり，さまざまなものを人に与え，社会を支えてきた牛を紹介することによって，人と動物の関係をさらに俯瞰視できるようになりました。産業動物である牛は，最終的には人によって命を奪われます。畜産の現場で働く生産者は，命の重さを受けとめながら，過剰な愛着は持たず，愛情を注いで仕事を全うしています。自身が実験動物の飼育に携わり，葛藤を抱えた経験は，生産者の牛への姿勢を理解する助けになりました。

アニマルウェルフェアが畜産現場に広がる中，動物が感受性を持つ主体であることが社会に受け入れられつつあります。人以外の動物も感情を持つ主体であることが自明のこととなり，「動物に心があるか」が問われなくなることが，人と動物のよい関係にとってひとつの通過点となると思います。

人と自然，人と動物の関係のあり方は社会が決めていくことです。それが形成される際に，一人ひとりが自分とつながっている命を意識できるよう，私達，牛の博物館の活動が微力ながらもその一助になれば，と願います。

ダイバーシティを求めて

今回は国際担当常務理事がご報告します。国際担当常務理事の分掌は，国際委員会と国際賞選考委員会，そして「国際」とは少し違いますが男女共同参画推進委員会の担当です。それぞれにつき近況をご紹介します。

国際委員会

国際委員会では現在三つのワーキング・グループ（WG）が活動しています。第一は「日韓中三ヵ国シンポジウム」WG です。例年，日本，韓国，中国が持ち回りで，年次大会において三ヵ国シンポジウムを開催します。本 WG ではシンポジウムのテーマの選定，発表者の募集・選考や，今後の活動に関する議論等を行います。2018年の第82回大会では日本がホストとなり「災害のあとの心理学的支援」というテーマで各国から2名の報告がありました（日本からは筒井雄二先生，胡政飛先生）。併せて行われたラウンドテーブルでも，社会における心理学の実践や政策提言に向けた活動の重要性が議論されました。次回は2019年9月26日に天津師範大学で「意思決定」というテーマで行われます。

第二は「ICP2016記念事業 EPP（Emerging Psychologist Program）」WG です。この事業は ICP2016開催を記念し，若手育成のための国際活動を展開しようというものです。第82回大会では石井敬子委員，鈴木華子委員の尽力により，前日に1日のセミナー，期間中に若手によるシンポジウムが行われました。セミナーには宮本百合先生，後藤伸彦先生，李楊先生，Vinai Norasakkunkit 先生が講師として，また，アジアを中心とする国内外からの若手研究者が参加し，講演やポスター報告が行われ，同じ宿泊施設に泊まるなど，研究交流が深まりました。2019年度は大会期間中ではなく時期を改めて行う予定です。

第三は，「留学生ネットワーク」WG です。この事業は，日本の大学で心理学を学んでいる留学生，日本や母国で活動している元留学生，留学生を指導する教員，留学生問題に関心をもつ心理学者等を対象とし，会員・非会員によらずネットワークをつくることを目指しています。第82回大会では安藤清志委員，毛新華委員が中心となりシンポジウムも開催されました。現在，ネットワークの充実に向けて，さらなる参加者を募っています。ML をご参照ください。

これらの活動の他，国際委員会では各国の心理学会との連携，連絡も行っています。IUPsyS（国際心理科学連合）への参加もその一つです。二年に一度開催される総会に，日本心理学会からも2名の代表者（佐藤隆夫先生と筆者）が参加しています。世界と歩調をあわせて心理学教育の充実や国際的な連携を図ろうとしています。また，関わりの深い学会の理事である会員を，大会に派遣したりしています。

MOU（協力協定）のある諸国の心理学会との連携も委員会の仕事です。現在 MOU のある国や地域は中国，韓国，オーストラリア，南アフリカ，台湾，米国，マレーシア，スウェーデン，英国，フィリピン，インドネシア，ロシア，インドの13ヵ国です。これらの学会に年次大会への参加を求めています。

国際賞選考委員会

次に，国際賞選考委員会についてご紹介します。本委員会では特別賞，功労賞，奨励賞を顕彰するための選考を行います。例年11月に応募を開始し，1月が締め切り。委員会委員が2 ～ 4月で選考し，4月の常務理事会で承認を受けます。安藤清志委員長のもと，2019年度は特別賞：室伏靖子先生，功労賞：太田信夫先生，長谷川寿一先生，奨励賞は5名の若手の研究者となりました。2019年の第83回大会で授賞式や講演が行われます。

男女共同参画推進委員会

この委員会は，人文社会科学系学協会における男女共同参画推進連絡会（ギース）への加盟をきっかけに，2018年に常務理事会のもとに設立されました。青野篤子委員長のもと，上記協議会に参加し，第82回大会でも男女共同参画を促すシンポジウムを行いました。前回の選挙で女性役員，女性代議員の比率が大きく高まったことは喜ばしいことです。

おわりに

私は2013年6月から3期にわたり国際関係の仕事をさせていただきました。昨今は国際関係においてもジェンダーにおいても，とみに多様性が広がっているように感じます。ちなみに Diversity in Harmony は ICP2016の標語でもありました。さらなる深化と広がりを願っています。

（国際担当常務理事･立命館大学教授　仲真紀子）

認定心理士の会から

参加することの意味，あなたの役割は？

最近話題になっている「ホラクラシー組織」――これは上司と部下のような肩書きが無く，フラットな組織体制をもつ新しい組織です。構成員個々が役割を果たすためにどう動くべきかを常に考えて，形態も担当も変化していくイメージです。

認定心理士の会もまた，日本心理学会の一つの委員会として，運営委員会と地方支部会等，ヒエラルキーの組織ではありますが，プロジェクトやイベント等の運営に関しては，委員長から認定心理士の会員の方までが上下の関係ではないことを，ご理解いただきたいと思います。これは，運営委員をはじめ，関わっている全員が無報酬のボランティアであるということも一つの理由です。会の目標「人々の心の健康と福祉の増進に寄与すること」に対して，熱意と時間と知識と経験を提供できる方が，どのようにして，目標への役割を果たせるか。アイディアを出し，それを実践くださる方々が次々に参加してくださることを期待しております。

そして，皆様が役割を担う現在進行中のプロジェクトが「シチズン・サイエンスプロジェクト」です。ご参加は任意ですが，心理学の基礎知識をもつ認定心理士だからこそ果たせられる業務です。得られた結果は日本心理学会が解析し，論文発表，学会発表を通じて公表する予定ですので，是非ご参加ください。https://psych.or.jp/authorization/citizen/

委員会・支部会はそれぞれが本業の傍ら時間を工面して携わっています。期待に対して不十分であることもございますが，そこはご参加して気がつかれた皆様のサポートを期待したいところです。

（認定心理士の会運営委員会委員　池田琴世）

若手の会から

心理学分野の展望――職域拡大の可能性を探る

昨年の9月に第1回公認心理師国家試験が実施され，約2万8千人が試験に合格しました。国家資格であることから，職域の拡大が期待されています。これまで心理学は職業に直結しにくい学問であったことから，心理学に関する国家資格ができたことで心理学に関心をもつ若い人が増えることは，一個人としては大変嬉しく思います。それと同時に，公認心理師に限らず，心理学分野の展望についてもっと広い視点で捉え，心理学の社会貢献について次世代を担う私たちが考えることが大切だと思っています。

今年度の日本心理学会第83回大会においても，昨年度の大会に引き続き，若手の会の企画によるシンポジウム，プレゼンバトル・ワンショット発表会，進路相談会などを行う予定です。今年のシンポジウムは，「若手心理学者の活躍する場－国立の研究機関から民間企業等の新しい活躍の場まで－」というテーマで開催し，心理学者の活躍の場の展望性について議論します。心理学分野で研究職を目指す場合，アカデミア以外のキャリアパスについて少しイメージが湧きにくいのではないでしょうか？だからこそ，若手に対する多様なロールモデル・多様なキャリアパス事例を紹介し，心理学を学ぶことで活躍できる職域やその拡大について若手の皆さんと一緒に考えたいと思っています。そして，心理学を活かす方法やフィールドについて模索することが，ひいては心理学の社会への貢献可能性を考えることに繋がるのではないかと考えています。

若手の会では，一人でも多くの若手の皆さんに若手の会の活動を，さらには心理学界を一緒に盛り上げていただきたいと強く願っています。多くの皆さんのご参加をお待ちしています！

（若手の会代表幹事　三浦佳代子・前田駿太）

資格認定委員会より

1. 認定心理士について

平成30年度第6回（通算第174回）認定心理士資格認定委員会が平成31年2月16日に開催され，1月16日までに受け付けた573件を審査し，555件を合格，12件を保留，6件を不合格としました。また，第5回までの保留・不合格等について追加資料の整った13件を再審査し，9件を合格，3件を保留，1件を不合格としました。この結果を受け平成30年度の累計で，初回審査件数は3,825件，総審査数は3,899件，合格件数は3,801件，資格取得者は3,620名となりました。その結果，資格取得者は累計59,897名となりました。なお，平成31年3月31日で旧基準（2007年版）による申請受付を終了し，平成31年度からは，新基準（2014年版）による認定のみとなります。平成31年度の認定委員会の開催予定日は平成31年4月20日（土），令和元年6月8日（土）です。

2. 認定心理士（心理調査）について

同委員会で，第5回までの保留・不合格等について追加資料の整った1件を再審査し合格としました。この結果を受け，平成30年度の累計で，初回審査件数は56件，総審査数は65件，合格件数は55件，資格取得者は52名となりました。その結果，資格取得者は累計103名となりました。

また，同委員会では，2月15日までに大学から申請のあったカリキュラム認定12件について審査しました。

3. 認定心理士の会について

認定心理士の会は，平成31年3月31日時点で会員数は4,035名になりました。本会は，平成30年度には，前の号までにご報告した1月31日までに合計17件のイベントを開催してきましたが，それ以降平成31年3月31日までに，「職場で活きる心理学－基礎・臨床・現場から－」（中国・四国支部会公開シンポジウム，2月9日，聖カタリナ大学松山市駅キャンパス），「心理学の基礎から社会への応用を考える」（近畿支部会公開セミナー，3月3日，立命館大学大阪いばらきキャンパス），「集団内の対立とその解決の心理学」「認知トレーニングは可能か？」（北陸支部会講演会in富山，3月3日，大学コンソーシアム富山・駅前キャンパス）を開催しました。平成30年度は合計20件のイベントが全国各地やネットを通して開催され，多くの認定心理士の方にご参加いただき，認定心理士としての資質の向上のための研鑽に励んでいただくだけでなく，日本心理学会からの講師も交えて認定心理士の方々の間で活発な情報交換をしていただきました。平成31年度（令和元年度）も，認定心理士の会運営委員会や幹事会を中心にして，さまざまなイベントが企画されています。順次，認定心理士の会メーリングリストで配信し，日本心理学会のホームページの「大会・行事案内」のなかの「認定心理士の会イベント」に掲載します。

4.「シチズン・サイコロジスト奨励賞」について

同賞には17件のご応募，ご推薦がありましたが，第1回の授賞2件が決定しました。五十音順に，池田琴世氏（認定心理士の会オンライン支部会支部会長），横山小夜子氏（アスペ・発達凸凹の集い「優しい時間」代表）です。日本心理学会第83回大会プレコンベンション学術交流会（9月10日，大阪）で授賞式が行われます。

（資格担当常務理事・日本大学教授　岡隆）

編集後記

今回の特集は，多くの心理学関係者，特に臨床領域にあまりなじみのない方々に，この生まれたての国家資格を知っていただくために企画されました。そこで，まず国家資格化に中心的な働きをなさってきた先生方からこの資格についてご紹介いただき，さらに，この資格の意義や役割を紹介するため，通常の2倍以上の執筆者に寄稿をしていただきました。多くの方々に，この国家資格を少しでも身近に感じられるようになることを願っています。　（大久保街亜）

編集委員（五十音順）

編集委員長	川口　潤	名古屋大学
副委員長	大久保街亜	専修大学
委員	漆原宏次	近畿大学
	大江朋子	帝京大学
	金井嘉宏	東北学院大学
	河原純一郎	北海道大学
	北﨑充晃	豊橋技術科学大学
	後藤和宏	相模女子大学
	清水由紀	埼玉大学
	下津咲絵	京都女子大学
	旦　直子	帝京科学大学
	手塚洋介	大阪体育大学
担当常務理事	原田悦子	筑波大学

心理学ワールド［86号］2019年7月15日発行　　年4回発行（1月，4月，7月，10月）

発行人―坂上貴之
編集・発行―公益社団法人　日本心理学会　〒113-0033　東京都文京区本郷5-23-13　田村ビル　TEL 03-3814-3953
表紙デザイン―虎尾　隆　　印刷・製本―新日本印刷
制作―（株）新曜社